令和５年度

公共ホール邦楽活性化事業報告書

一般財団法人 地域創造
Japan Foundation for
Regional Art-Activities

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的な文化・芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業を実施しています。

これらの事業の一環として地域創造では、平成22年度から都道府県や政令指定都市を対象とした邦楽地域活性化事業を実施してきましたが、令和３年度から対象を市町村等に変更して、「公共ホール邦楽活性化事業」を実施しています。

公共ホール邦楽活性化事業は、アウトリーチの研修を終えた邦楽の演奏家と、専門家であるコーディネーターを市町村等に派遣し、公共ホールと演奏家が共同で企画した参加体験型の地域交流プログラムと、コンサートなどのホールプログラムを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、日本の伝統音楽の継承発展、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国７の団体との共催により実施された、「令和５年度公共ホール邦楽活性化事業」の内容を取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当者による事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターによるレポートを掲載し、事業に関して気づいた点や、企画・制作のノウハウ、事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点を、ケーススタディとして記録しています。あわせて、邦楽アウトリーチの実例として、各地域交流プログラムの進行シートを掲載しています。

全国の地方公共団体ならびに公共ホールのみなさまにおかれましては、邦楽に関する地域交流プログラムも含めた自主事業にお取り組みいただき、本報告書をご活用いただければ幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施いただいた実施団体、各地域に寄り添ったプログラムを実施していただいた演奏家、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、その他多くの関係者の皆さま方のご協力のもと、令和５年度の事業を実施することができましたことに対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

（本文中の社名、所属、役職等は令和５年度のものです）

Ⅰ．令和５年度公共ホール邦楽活性化事業の概要…… 5
実施概要…… 6
事業体制・実施日程…… 7
全体研修会実施概要…… 8
チーフコーディネーター報告：児玉　真…… 9

Ⅱ．令和５年度公共ホール邦楽活性化事業報告……11
＜埼玉県三郷市＞
実施団体報告：白石　真弓（公益財団法人三郷市文化振興公社）……12
コーディネーターレポート：伊藤　由貴子……16
アウトリーチ進行シート：大久保　真利子……18

＜東京都調布市＞
実施団体報告：渡部　和哉（公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団）……20
コーディネーターレポート：谷垣内　和子……25
アウトリーチ進行シート：林　真智子……28

＜滋賀県長浜市＞
実施団体報告：加藤　哲（公益財団法人長浜文化スポーツ振興事業団）……29
コーディネーターレポート：大久保　真利子……33
アウトリーチ進行シート：田中　舞……35

＜大阪府河内長野市＞
実施団体報告：苅谷　文隆（公益財団法人河内長野市文化振興財団）……36
コーディネーターレポート：米澤　浩……39
アウトリーチ進行シート：名取　萌音……42

＜兵庫県神戸市＞
実施団体報告：飛屋　健司（公益財団法人神戸市民文化振興財団）……44
コーディネーターレポート：伊藤　由貴子……49
アウトリーチ進行シート：吉田　佐和子……51

＜兵庫県三田市＞
実施団体報告：大浦 淳子（三田市総合文化センター指定管理者
株式会社JTBコミュニケーションデザイン）……52
コーディネーターレポート：米澤　浩……56
アウトリーチ進行シート：田中　舞……59

＜熊本県宇土市＞

実施団体報告：髙田　大介（特定非営利活動法人宇土の文化を考える市民の会）……60
コーディネーターレポート：谷垣内　和子……64
アウトリーチ進行シート：丹羽　梓……66

Ⅰ．令和５年度公共ホール邦楽活性化事業の概要

令和５年度公共ホール邦楽活性化事業　実施概要

１　趣　旨

公共ホールの活性化と地域における芸術活動を担う人材の育成及び環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、市町村等との共催により、公共ホール等を拠点とした、邦楽演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

２　対象団体

市町村（特別区及び政令指定都市含む）及び市町村の設置する公の施設の管理を行う指定管理者等

３　事業内容

（１）研修事業

①全体研修会

実施団体の担当者を対象に、邦楽事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を実施

②個別研修

担当コーディネーターが現地での事前打合せや会場下見を実施、事業の円滑な実施のための助言等

（２）公演事業

①地域交流プログラム（アクティビティ）

学校等でのアウトリーチ（ミニコンサート）など、地域との交流をはかる事業を原則として４回（１日につき２回）実施

②ホールプログラム

公共ホール等において邦楽コンサートまたはワークショップを実施（原則として１回）。
なお、コンサートは有料公演とし、入場料収入は実施団体に帰属する。

４　経費負担

（１）一般財団法人地域創造が負担する経費

①演奏家派遣に係る経費

出演料、現地移動費を除く交通費・宿泊費等、派遣に係る保険料、楽器運搬費（現地運搬費を除く）

②コーディネーター派遣に係る経費

謝金、現地移動費を除く交通費・宿泊費等、派遣に係る保険料

③地域交流プログラム負担金

実施市町村が支出した地域交流プログラムに係る経費のうち、楽器運搬費およびこれに準ずるものとして特に地域創造が認めたもの（限度額10万円）

（２）実施団体が負担する経費

一般財団法人地域創造が負担する経費以外の経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など）

令和５年度公共ホール邦楽活性化事業　事業体制・実施日程

■事業体制

令和４-５年度登録演奏家	川田　健太（箏、三絃）	
	藤重　奈那子（箏、地歌三絃、十七絃）	
	棚原　健太（歌三線）	
チーフコーディネーター	児玉　真（一般財団法人地域創造プロデューサー）	
コーディネーター	伊藤　由貴子（(公財）神奈川芸術文化財団音楽事業部長／神奈川県立音楽堂館長）	神戸市、三郷市
	谷垣内　和子（邦楽評論家）	宇土市、調布市
	米澤　浩（邦楽演奏家、NPO法人日本音楽集団副代表）	三田市、河内長野市
サブコーディネーター	大久保　真利子（九州大学総合研究博物館専門研究員） ※長浜市ではコーディネーター業務を担当	三郷市、長浜市
	丹羽　梓（横浜国立大学大学院博士後期課程）	宇土市
	林　真智子（フリー舞台芸術制作者）	調布市
	吉田佐和子（(一社）福知山芸術文化振興会 代表理事、(株）Locatell 代表取締役社長）	神戸市
アシスタント	田中　舞（一般財団法人狛江市文化振興事業団）	三田市、長浜市
	名取　萌音（フリーランス）	河内長野市

■事業実施日程　※日程順

担当地域一覧

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	本番日程	登録演奏家	コーディネーター等
1	熊本県	宇土市	特定非営利活動法人宇土の文化を考える市民の会	宇土市民会館	令和５年10月５日（木）～７日（土）	藤重奈那子	谷垣内和子 丹羽　梓
2	兵庫県	神戸市	公益財団法人神戸市民文化振興財団	神戸市立中央区文化センター	令和５年10月19日（木）～21日（土）	藤重奈那子	伊藤由貴子 吉田佐和子
3	兵庫県	三田市	三田市総合文化センター指定管理者 株式会社JTBコミュニケーションデザイン	三田市総合文化センター郷の音ホール	令和５年12月１日（金）～３日（日）	棚原　健太	米澤　浩 田中　舞
4	東京都	調布市	公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団	調布市文化会館たづくり	令和６年１月11日（木）～13日（土）	川田　健太	谷垣内和子 林　真智子
5	埼玉県	三郷市	公益財団法人三郷市文化振興公社	三郷市文化会館	令和６年１月25日（木）～27日（土）	棚原　健太	伊藤由貴子 大久保真利子
6	大阪府	河内長野市	公益財団法人河内長野市文化振興財団	河内長野市立文化会館（ラブリーホール）	令和６年２月８日（木）～10日（土）	藤重奈那子	米澤　浩 名取　萌音
7	滋賀県	長浜市	公益財団法人長浜文化スポーツ振興事業団	木之本スティックホール	令和６年３月７日（木）～９日（土）	川田　健太	大久保真利子 田中　舞

令和５年度公共ホール邦楽活性化事業　全体研修会実施概要

１　概要　　令和５年度の実施団体担当者を対象とした全体研修会を実施。１日目は当事業の基本的な考え方などのゼミを、２日目はゼミに加えて令和４・５年度登録演奏家による演奏とトークのプレゼンテーションを、３日目はグループに分かれて企画検討及び発表を実施した。

２　参加者　令和５年度実施団体担当者

３　日程　　令和５年５月10日（水）～12日（金）

４　会場　　５月10日・12日：一般財団法人地域創造会議室
　　５月11日：文京シビックホール　会議室・多目的室

５　全体研修会スケジュール

月日	会場	内　容	
5月10日	地域創造 会議室	14:00 ～ 14:10	開会・地域創造挨拶・参加者紹介（10分）
		14:10 ～ 15:40	①ダンスワークショップ（90分） 【セレノグラフィカ（地域創造ダン活支援登録アーティスト）】
			休憩（20分）
		16:00 ～ 16:30	②事業概要説明（30分） 【地域創造】
			休憩（5分）
		16:35 ～ 17:20	③アウトリーチ概論（45分） 【児玉真／チーフコーディネーター】
			休憩（10分）
		17:30 ～ 18:15	④邦楽のいろは（45分） 【谷垣内和子（コーディネーター）】
5月11日	文京シビックホール 会議室・多目的室	9:45 ～ 10:30	⑤公共ホールにとっての邦楽事業とは（45分） 【伊藤由貴子（コーディネーター）】
			休憩（5分）
		10:35 ～ 11:35	⑥市町村事例と邦楽公演の制作について（60分） 【米澤浩（コーディネーター）、髙井真明（秩父宮記念市民会館）】
			休憩（10分）
		11:45 ～ 12:30	⑦グループワーク（地域について）（45分） 【伊藤由貴子、谷垣内和子、米澤浩、児玉真】
			昼休憩・移動（60分）
		13:30 ～ 15:00	⑧令和４・５年度登録演奏家プレゼンテーション 川田健太（箏、三絃） 藤重奈那子（箏、地歌三絃、十七絃） 棚原健太（歌三線）
			休憩（5分）
		15:05 ～ 15:35	⑨グループワーク（プレゼン感想）（30分） 【伊藤由貴子、谷垣内和子、米澤浩、児玉真】
			休憩（10分）
		15:45 ～ 17:30	⑩実施団体によるプレゼンテーション （105分：1団体15分×7団体）
			休憩（10分）
		17:40 ～ 18:40	交流会（60分）
5月12日	地域創造 会議室	10:00 ～ 12:00	⑪グループ別企画検討（120分） 【伊藤由貴子、谷垣内和子、米澤浩、児玉真（コーディネーター）】
			休憩・昼食（60分）
		13:00 ～ 14:30	⑫企画発表～フィードバック（90分）
		14:30 ～ 14:40	事務連絡（10分）
		14:40	閉会・地域創造挨拶（10分）

チーフコーディネーター
児玉　真

邦楽活性化事業　2023年度の活動から思うこと

答えは質問の不幸である（モーリス・ブランショ）
答えは好奇心を殺す（ウィルフレッド・ビオン）

「謎や問いには簡単に答えが与えられない方が良いのではないか。不明のままでいる謎はそれを抱く人の体温によって成長、成熟し、さらに豊かな謎に拡がっていくのではないか。一段と深みを増した謎は底の浅い答えよりも思考に貴重なものを内に宿している」と作家の黒井千次も書いています。

最近は医療の世界でもSOAP（Subject,Object,Assessment,Plan）といわれ、早く正確に問題を見つけて解決する、というのが重視されているらしいのですが、実は現場ではわからないこと、直せないことが意外と多く、やりながら手を入れるTreatmentの発想が大事といわれているとのこと。これって、アウトリーチの現場でも言えそうな気がします。

さて、1990年代になって、クラシック音楽はもう時代遅れでオワコンとして廃れていくだろう、ということが言われはじめ、現場のプロデュースをしていた私は、そのときに、「いやいや、生きている内にはそのような状態は見たくないなあ」ということから、何かをやらなくてはと思ったのが普及やアウトリーチを始めたきっかけでもあります。邦楽の関係者の間ではもっと深刻に問題意識があるようだと気がついたのは2000年代に入ってからで、特に公立ホールでは邦楽を扱わないのは何故だろう？というのが思考のきっかけです。

アウトリーチは、その事業に関わる人が多いこと、音楽を共有する相手（五島みどりさんのシェアリングという言葉が印象的です）のバックグラウンドも多種多様な人達であるというのが大きな特徴で、可能性もあり、難しさもあります。だから、そのことは、私もアウトリーチのように簡単に答えを出せない事業のコーディネートをするときにいつも気に留めていることです（もちろん、全然上手くいっていないのですが…）。疑問や迷いは持ち続けてそれを育てていくという姿勢こそが豊かな結果や未来を生むという意味では、ブランショの言葉はアーティスティックなものを扱うものにとって大事な発想だと思っています。

さて、今年の邦楽活性化事業は、新型コロナによる影響も漸く小さくなり、市町村プログラムとしてはほぼ通常の形でできることになりました。各地の文化会館という施設とその機能が地域のコミュニティに果たす役割を意識して地域プログラムを考え易くしたことで事業の企画の性格が若干変わってきて、邦楽活性化事業に新しい窓が開いたような印象があります。実際、５月に行われた全体研修会（実施会館担当者のための研修会）でも、アウトリーチという手法が街を元気にするか？という出発点から、行き先や手法を考えていけるのではないかという話をしました。邦楽ジャンルは地域創造の事業でも、10数年間、学校教育の一環としての邦楽器及び日本の音楽の普及としての性格が強かったのですが、地域創造という団体の本来の方向性というか個性として、より広くコミュニティのいろいろな相手や課題に対してのアクティビティを工夫し考えることが必要になってきたという認識もありますし、経験的に出来るようになってきたな、という印象もあります。逆に言うと、アーチストも会館の担当者も、コミュニティの中にある様々な課題や状況と付き合い、思考をめぐらす必要があるということでもあるのですが、今年は各地でその萌芽が見えてきて、邦楽活性化事業が「邦楽」の普及ではなく、邦楽という芸術活動を活用して、地域に住む人達の精神生活が豊かになり、また、地域の人達の関係性や共感が活かされていく活動、という方向での新しい可能性が見えてきたように思います。それが普及にもつながる…。

各会館の担当の方々がそのことを意識して活動先を選んでくれたのであれば、地域創造としてもとても嬉しい活動になったとも言えます。

例えば、宇土では昔の駅舎のように地域の人達が気持ちを共有できる場所や子育て支援施設でのアクティビティができ、他にも私が見に行ったところでは、例えば調布では特別支援学校の生徒にホールを体験してもらう、神戸では子ども図書館（子ども本の森）や、今後学校の先生になるであろう大学生へのプレゼンテーションが出来たりと、各地で様々な試みができた年だったと思います。

一方演奏家の皆さんやコーディネーターの方達にとっても、新しいタイプの活動として、いろいろと

考えることが多い現場が多く、そこで何をすれば趣旨が果たせるか頭を悩ませたことが多々あったかもしれませんが、そもそもアウトリーチは「こうすれば大丈夫」という答えが簡単に出る問題ではないので、「わからないならやってみよう」の精神でいろいろとアイデアを試してみて頂いて良いと思います。

今季の演奏家の３組は、２年間の事業を終えて、次年度からは支援アーチストとして活動して頂くのですが、今度はコーディネーターの役回りも会館の担当者と分け合ってプログラムを作って行く必要があります。実はおんかつでも支援事業でその才能を開花させた人が多いので期待しています。

Ⅱ. 令和５年度公共ホール
邦楽活性化事業報告

実施団体：公益財団法人三郷市文化振興公社
実施時期：令和６年１月25日（木）～令和６年１月27日（土）
出演アーティスト：棚原健太（三線）　町田倫士（琉球箏）　大城建大郎（琉球笛）

アクティビティ

タイトル：琉球古典音楽に触れあう①
期　　日：令和６年１月25日　9：40～10：25
会　　場：三郷市立前間小学校　体育館
参 加 者：４年生　47名

令和６年４月から学校統合する統合先の小学校４年生を対象に、アウトリーチを実施しました。沖縄の四季や気候､琉球楽器の紹介、また琉球楽器の歴史の中で三線の製造に使用される蛇皮が披露されました。児童数が多いため邦楽を身近に感じる体験的要素が薄まらないか心配していましたが、中学年の旺盛な知識欲や行動欲で、前のめりで聞く児童や積極的に手を挙げて発言をする児童が多く、最後まで集中力を切らさずに楽しんでいました。

タイトル：琉球古典音楽に触れあう②
期　　日：令和６年１月25日　10：45～11：30
会　　場：三郷市立前間小学校　体育館
参 加 者：５年生　37名

１回目と同様の構成で、古典音楽や沖縄民謡の演奏、沖縄の唄の特徴、琉球音階の説明等に頷きながら聴く姿が印象的でした。5年生は三味線を授業で学ぶ機会があり、似た雰囲気を持つ三線や初めて見る琉球楽器に関心を高めていました。児童が三味線で練習した「さくらさくら」を琉球音階で弾くと、普段耳にしている音階との違いに驚き、沖縄音楽の魅力を感じ取ることが出来ました。

タイトル：琉球古典音楽に触れあう③
期　　日：令和６年１月26日　9：40～10：25
会　　場：三郷市立後谷小学校　音楽室
参 加 者：４年生　29名

令和６年４月に学校統合により閉校となる小学校４年生を対象に、アウトリーチを実施しました。児童たちにあまり耳馴染みのない琉球古典や沖縄民謡について、文字やイラストを印刷したフリップを活用して視覚と聴覚から分かりやすく伝えることで、音楽をはじめ受け継がれる伝統や文化についても十分に理解し、生の演奏を楽しんで鑑賞していました。

タイトル：琉球古典音楽に触れあう④
期　　日：令和６年１月26日　10：45 ～ 11：30
会　　場：三郷市立後谷小学校　音楽室
参 加 者：５年生　21名

後谷小学校では音楽室でアウトリーチを実施出来たこともあり、児童との距離が近く、邦楽をより身近に感じでもらうことが出来ました。『口説（くどぅち)』作りでは、学校生活での四季の出来事のほか、後谷小学校で過ごした5年間の風景や思い出を出し合い、歌詞を創作しました。完成した口説を披露する場面では、自然とクラス全体で合唱となり一体感が生まれました。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：琉球の音色　～心から姿　若くなゆさ～
期　　日：令和６年１月27日　14：00 ～ 15：30
会　　場：三郷市文化会館　小ホール
参 加 者：358名（予定枚数終了）

第一部は琉球古典音楽を、第二部は沖縄民謡をお届けしました。曲間では「うちなーぐち」によるトークで、楽器や衣装、琉球音階の特徴等を紹介し、ホール全体に沖縄の暖かな風が流れました。

サブタイトルの『心から姿　若くなゆさ（くくるからすぃがたわかくなゆさ)』とは、沖縄の言葉で「春は心も姿も若返るように感じられる」という意味であり、1月の開催にあわせて新年を迎えリフレッシュした気持ちになれるコンサートを構成しました。

ホール担当者の意見・評価
三郷市文化会館　白石　真弓

①　応募の動機・事業のねらい

三郷市文化会館では、邦楽のコンサート事業や施設利用が少なく、職員を含め三郷市全体で邦楽に触れる機会が年々減少しています。市民や児童が、生の演奏を観て、聴いて、心で感じる、得がたい経験を提供し、古くから現代まで受け継がれてきた日本の伝統芸能に興味や関心を持つきっかけになってほしいとの想いから応募しました。

またアウトリーチ事業において、当館も数年前より実施していますが、毎年同じ場所と内容で変化が無く、知識も乏しいため、本事業を通してノウハウを学び、今後の事業展開の幅を広げていきたいと考えています。

②　企画のポイント

琉球王国時代より受け継がれる琉球・沖縄の音色や文化をしっかり届けること、沖縄の音楽・郷土文化を通してふるさと三郷市の文化を振り返る機会となることを目指しました。

アクティビティは、今年度学校統合される小学校の同学年の児童たちが、新たな生活の中で交流を深めるきっかけになればと願い、アウトリーチを企画しました。琉球の音色がいつまでも心に残るようなプログラムを心掛けました。

ホール公演は、初めてのかたにも分かりやすく聴いていただけるように、沖縄ポップスの親しみやすい曲を1曲加え、曲間では楽器や衣装の説明を織り交ぜた構成にしました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

私自身がこれまで「邦楽」に触れてこなかった圧倒的な知識不足と、本事業の趣旨の認識不足でなかなかイメージが掴めず、目的やねらいを捉えるのに時間を費やしました。本事業に申込みをした前担当者の異動と、副担当が不在の中で事業が進み、他の事業も掛け持ちしているため時間に余裕がありませんでした。

アクティビティでは、小学校でのアウトリーチが初めてであり、教育委員会や小学校とあまり接点がないため、学校側は突然の提案に戸惑われたと思います。また、１クラスだけ児童数が多く、邦楽を身近に感じられなくなることを懸念しました。

ホール公演では、このようなプロ公演はパッケージを買い取ることしかしていなかったため、公演タイトルやコンセプト、チケット価格決め等、すべてが初めての経験で、的確な判断が出来ているか不安が多くありました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーター、サブコーディネーター、アーティスト、地域創造からいただくアドバイスのおかげで不安が減り、着実に事業を進めることが出来ました。

アクティビティは、アウトリーチを学校統合する２校で行いたいと決めており、直接２校の小学校へ伺い、校長先生を交えて本事業の趣旨や児童たちへの想いを説明し、協力を得ました。児童数の多さは、全員の顔が見られる椅子の配置や2グループに分かれての口説作りを行い、距離を感じさせない空間づくりに努めました。

ホール公演では、メールやZOOM会議の中で、邦楽のいろはからチラシ作りのアドバイスまで多岐にわたり教えていただきました。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティは、学校側のご協力で教室の前日準備や早朝から室温調節が入り、設営から本番までスムーズに実施することが出来ました。児童たちは事前に鑑賞したアーティストたちからのユーモア溢れるビデオメッセージと、本番での登場から軽快なトークで楽しく琉球音楽に触れられたと思います。世界にひとつだけの四季口説が書かれた模造紙をプレゼントされ嬉しそうな様子に、音楽の力を感じました。

ホール公演は、誰もが立ち上がり会場一体となって踊るカチャーシーと満員御礼の客席から鳴りやまない拍手、そして公演後にお客様からいただいた感想や御礼、びっしりと記入されたアンケート等から、本公演が非常に素晴らしいものだったと実感しました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

全体スケジュールを組み立てていましたが、実際に動いてみないと分からないことや予測できていなかったことが多くあり、ひとつひとつの予想外の出来事が勉強になりました。勤務時間の調整や公用車の確保と運転依頼等、職場内の協力体制を整えることが重要であると痛感しました。

ホール公演は、嬉しい反響でもありますが、チケットが完売したあとも大変多くの問い合わせをいただき、公演当日も何十人ものお客様をお断りしました。今回鑑賞できなかった市民の邦楽への興味関心が消えないよう、邦楽事業を継続していくことが今後の課題であると考えます。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

小学校のアウトリーチで四季口説を行った際、どのクラスも秋の行事を「文化会館のステージで市内音楽会」のワードが出てきました。芸術文化の活動拠点に文化会館があることを改めて実感し、地域の方々にとってより良いホールと思っていただけるよう、今後も様々なジャンルの事業に取り組んでまいります。

また、本事業で使用した立奏台は、市内の箏製造会社のご厚意でお借りしました。本事業をきっかけに新しい縁に恵まれることが出来ました。馴染みが薄れつつあると感じていた市内の邦楽活動は、邦楽に携わっている人も邦楽を聴きたい人も大勢いることが分かり、その邦楽の魅力を伝える機会を作っていくことが私たち文化会館職員の使命であると考えます。

コーディネーターレポート
伊藤　由貴子

地域創造のアーティストに、棚原健太さんたち沖縄音楽のチームが入って２年。三郷市でのアクティビティは、主催の三郷市文化会館（以下、会館）にとっては初めての邦楽事業であり、棚原さんたちにとっては、本事業としての最終回。会館職員の皆さんの渾身の制作と広報に支えられ、棚原チームは２年間の試行錯誤の成果を十二分に発揮､子どもたちの笑顔いっぱいのアクティビティと､満員御礼のホールコンサートが実現しました。関係の皆さまに改めて御礼申し上げたいと思います。

１．めざしたこと

今回、会館が棚原チームを選んだ理由がちょっとユニーク。よく言われる「邦楽に触れる機会が少ないので…」に加え､「海への憧れが強い海なし県の県民に向けて、沖縄音楽とアーティストの個性、そしてその楽しさを届けたい」、でした。この明快な思いが、企画全体を包む方針となりました。

アーティスト側は､「沖縄の音楽を知ってもらいたい」のはもちろんですが､「今回の事業を通じて、三郷市の方々が郷土の文化を振り返るきっかけになれば」と願っていました。こちらも新鮮な視点。東京や千葉と隣接し、新旧の住民が入り混じっているという三郷市の地域性を考えるとき､「郷土の文化」という言葉は、私たちをふと立ち止まらせる力を持っていました。棚原チームには、郷土沖縄の音楽が文化として体に染み込んでいて、音楽は彼らの呼吸そのもの。そんな自分たちを通して、音楽と風土や郷土とのつながりに目を向けてほしい。その思いは、本事業を通じてずっと響いていました。

２．小学校での「口説」づくり

アクティビティ先は、小学校２校。うち１校は、令和５年度末、つまり本事業実施の２ヶ月後には廃校となることが決まっており、統合先の学校との相互交流が、今回の企画の意図するところでした。対象は両校とも４、５年生。勿論本事業では、両校の生徒が一緒に何かやるということはできませんが、両校の同学年の児童が同じ体験を共有できるいい機会であり、廃校となる小学校の子どもたちにとっては、思い出づくりの一つになったことでしょう。

アクティビティに先立ち、棚原チームのビデオメッセージが、会館を通じて各校に送られていました。「ビデオで見た本物の人が来る」と、子供たちは楽しみにしていたようで、そのネタからアクティビティがスタート。プログラムは、［沖縄音楽についての導入／楽器の紹介（三線紹介では素材となるニシキヘビの皮を見せる等）／沖縄音階の紹介（沖縄音階で「カエルの歌」等）／口説（くどぅち）づくり］という構成で、沖縄の音に耳が慣れてくる後半に、できるだけ時間的な余裕を持って子どもたちの「口説作り」に当たる、という計画でした。

その「口説作り」。春夏秋冬の風物を歌う古典音楽『四季口説（しきくどぅち)』の旋律を使って、子どもたちから学校での思い出を聞き取って歌詞を作り、それを棚原さんたちの演奏で発表する、というもの。３人の絶妙な進行で、クラスみんなで共有してきた日常の出来事や風景が、わいわいと飛び出し、歌詞になっていく姿は、実に生き生きしたものでした。そして出来上がった「オリジナル口説」の演奏では、ただ聞くだけにあらず、曲の旋律を耳で覚えてしまった子どもたちが自然と一緒に口ずさむシーンも。子どもたちの体の中に沖縄音楽が染み込むのを感じました。

最後はアンコールとして、大城さんがカチャーシーの踊り方を即席レッスン。みんなで踊って盛り上がる沖縄の文化を体験するひとときとなりました。

３．ホールコンサート

コンサートは休憩を挟んで約90分のプログラム。開催が１月だったので、タイトルの副題は「新年に

なると心も姿も若返るように感じられる」という意味の沖縄言葉になりました。

前半は琉球王国時代の正装で、格調の高い琉球古典音楽を、後半は琉球絣の着物姿で人々の暮らしや心情を写す民謡と沖縄ポップスを。演奏は全７曲。もちろん、お客様を和ませるさまざまな演出が盛り込まれました。楽器紹介で巨大なニシキヘビの皮を披露したのは会館館長と職員の方。『てぃんさぐぬ花』の冒頭、舞台には箏が一人きり？と思うと、少し遅れて客席から三線と笛が登場。エイサーの定番曲『仲順流れ（ちゅんじゅんながり）』で、客席から掛け声をいただいて「コール＆レスポンス」。こうしたさまざまな要素が、３人ののんびりとしてユーモラスなトークで進行し、客席は沖縄ペースにどっぷりはまりました。

アンコール曲として棚原さんが選んだ沖縄民謡『汗水節（あしみじぶし）』は、働く喜びを歌った曲。物悲しいが淡々と、郷土の心を歌いました。鳴り止まぬ拍手に、最後はカチャーシーの即席レッスンを経て、客席みんなが手拍子や踊りで盛り上がったのでした。

４．会館の頑張り

今回担当となった会館職員の方は、公演を「イチから創る」体験は初めてだったそうです。一時は上司も心配するほどの頑張りよう。もちろん館長始め上司、同僚の協力も加わり、事業を成功に導きました。

特に、広報については事前準備がしっかりなされていました。例えば、アクティビティ用のビデオメッセージは、目論見通り子どもたちの期待を盛り上げました。チラシ作りでは、裏面にプロフィールとともに、その出身地が沖縄県の地図上に示され、各人の好きな沖縄料理も記載。これにより、沖縄料理店にチラシ設置をお願いしたそうです。三郷市文化振興公社の広報誌では、楽器や衣装、沖縄音楽のジャンルなどにも言及して興味を喚起する記事を掲載。地域の方々の心を捉える努力を重ねました。

当日配布のプログラム冊子の内容にも気合いがこもっていました。曲目解説や出演者プロフィール以外に、楽器の紹介や衣装の説明を入れ、また、沖縄言葉の歌詞・その読み仮名・標準語訳を書いたプリントを挟み込むなど、実に丁寧に、沖縄の音楽を伝えようと工夫していました。

その背景には、会館のお客様はこうしたことが知りたいに違いない、という予測と、初めて接する沖縄音楽をもっと知ってもらいたい、という担当者としての熱意があったのだと思います。それは、これまでの日常業務の積み重ね、経験あってこその発想でしょう。会館にとっては「初めての邦楽事業」だったかもしれませんが、決して「ゼロからのスタート」ではなかったのです。

５．最後に

忘れられないのは、コンサート当日の朝、会館に届いた手書きのお手紙。午後の本番に来場されるご高齢のお客様が、出演者宛に「今日は楽しみにしています」とわざわざお送りくださったのです。地域のお客様を大切にしてきた会館だからこその出来事。関係者一同、本当に嬉しくなりました。

ホールコンサートは満員御礼。そう、文化施設の担当者にとっての一番嬉しいのは、満員のお客様が「今日は楽しかった！」とニコニコしてお帰りになる姿に接すること。今回はまさにそうなりました。アンケート結果は、来場者の75％が三郷市在住、沖縄音楽初体験者が約80％。コメント欄には、楽しかった、もっと聞いていたかった等のご感想とともに、「次回」を望む声が数多く寄せられました。会館の皆さんには、ぜひこの結果をエビデンスに、今後のこうした事業の継続をめざしてください！

アウトリーチ進行シート（埼玉県 三郷市）
大久保　真利子（サブコーディネーター）

実施日	令和６年１月26日
実施先	後谷小学校
対象・実施先の情報	後谷小学校５年生20名（男性6名、女性14名）を対象に実施。同小学校は今年度をもって閉校となるが、新しい学校でもがんばれるよう準備しようという気持ちで学校生活を送っているとのこと。
出演者（編成）	棚原健太（歌三線）、町田倫人（琉球箏）、大城建大郎（琉球笛）
ねらい／目標	沖縄の音楽に触れ自由に感じてもらうとともに、身近な音楽や文化にも目を向ける。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
	入場	担任の挨拶、ホール担当者白石さんの挨拶 拍手にて入場	スタッフ：扉介助
0’00	M1（2’00） 《高離節》	歌三線、琉球箏、琉球笛	琉球笛：演奏の途中で児童の後ろから入場。
02’10	MC1（6’47） 棚原：挨拶 全員：自己紹介	みなさんこんにちは！せっかくなので沖縄の挨拶も覚えてほしい。はいさい！ （棚原さん、町田さん、大城さんの順でそれぞれの楽器を見せながら、はいさい！の挨拶とともに自己紹介。）	
	棚原：アウトリーチのねらい、沖縄音楽の説明	沖縄って聞いたことある？行ったことある？日本の南に位置し一年中温かい。すでに桜が咲いている。 今日は沖縄の音楽や楽器を知って、自分のなかで発見して、自由に感じてもらいたい。 沖縄の音楽はたくさんあるが今日は二つ紹介する。一つ目はお城で演奏された音楽。日本各地に城はあるが、沖縄に城があった時代は、琉球という王国だった。琉球にあるお城はこのようなお城だった。首里城という。朱い色で江戸城などとは違う雰囲気。 最初に演奏した曲はお城で演奏された曲。お城に来るたくさんのお客さまをもてなすために音楽が演奏された。	町田：調弦 大城：パネル「琉球」を提示 大城：首里城の写真を提示
	町田：沖縄音楽の説明、次曲紹介	二つ目は庶民の音楽。たとえば漁村で魚を売り歩く音楽や、農村で畑を耕して作物をたくさん作るぞといった音楽など。今日は《てぃんさぐぬ花》を紹介する。ホウセンカのこと。 昔の子どもはホウセンカの赤い汁を爪に塗ってネイルのようにして遊んでいた。爪先に色を染めるようにお父さんやお母さんの教えは胸に染めなさい、というメッセージが込められた歌。僕も小さい頃から聴いていてとても好きな歌。	大城：ホウセンカの写真を提示
8’30	M2（3’16） 《てぃんさぐぬ花》	歌三線、琉球箏、琉球笛	
11’06	MC2（9’49） 町田：琉球箏の紹介	棚原：《てぃんさぐぬ花》どうだった？優しい感じ？ 次に楽器を紹介したい。 町田：まずは琉球箏。何cmくらいあると思う？ 190cm、大谷翔平選手と同じくらい。桐で出来た胴体に13本の弦が張られている。箏柱を動かし音の高さを調整する。後ろには穴が空いていて、空洞になっている（裏面を叩いて音を聴かせる）。 約300年前に鹿児島県から沖縄に渡ってきた。日本のお箏も見たことある？楽器は全く同じもの。違いは二つ。弦を緩く張ることと、丸い爪を使うこと。年中温暖な沖縄を連想させるような、まろやかで優しい音色がする。 お箏だけの音色も聴いてほしい。見えづらい子は立って手元など見て。～少し演奏～	町田：調弦 大城：パネル「琉球箏」を提示 町田：箏を持って児童の近くに行く
	大城：琉球笛の紹介	次に琉球笛。笛は世界中にあり大体同じ構造。三郷市の祭でも笛が使われていると思う。次の祭の時に探してほしい。 材質は竹。息を吹き入れる穴が一つと、指で押さえる穴が六つ。笛はどこまでも届きそうな澄んだ音色が魅力だが、琉球笛は琉球箏と同じように、包んでくれるような優しい音色。 琉球笛がスゴイところは、何でも吹けるところ。リクエストある？ YOASOBIの《アイドル》を吹いてみたい。～少し演奏～	大城：パネル「琉球笛」を提示
	棚原：三線の紹介	最後の楽器は、三線。三味線とは違う。三つの線と書いて三線。琉球の時代に中国からやってきた。 胴には蛇の皮が貼られている。何の蛇だろう？アオダイショウではない。ニシキヘビの皮。ニシキヘビはとても大きい。今日は本物のニシキヘビを沖縄から持ってきた。4メートルくらいある。鱗の大きいお腹のところがいい音が鳴り、これくらいの皮で五つの三線ができると言われている。 動物はこれだけじゃない。右手にもっているのは「爪」と言い、水牛の角が使われている。	大城：パネル「三線」を提示 町田・大城：蛇皮を児童の前で広げる
21’05	MC3（1’24） 沖縄音階について	これまでいくつか聴いてもらったが、沖縄らしさを感じた？音階に特徴がある。レとラが無い。これを琉球音階という。みんなが聴いたことある曲も、琉球音階で弾けば沖縄の音楽になる。この曲知ってる？～少し演奏～《カエルの歌》。これを琉球音階で弾くとどんな魔法がかかるのかな。	大城：パネル「琉球音」を提示
22’29	M3(0’45) 《カエルの歌》	歌三線、琉球箏、琉球笛	
23’14	MC4（2’46） 大城：口説の説明	次の曲は「口説（くどぅち）」。たとえば旅の途中でみた景色や思ったことを即興的に歌詞にして歌うもの。今日は《四季口説》を紹介したい。沖縄の四季は三郷よりも分かりづらい（沖縄の四季のエピソードの紹介）。	大城：パネル「口説」を提示
26’00	M4（1’02） 《四季口説》	歌三線、琉球箏、琉球笛	

27’ 02	口説つくり（10’ 47）	棚原：歌詞が即興的というのは替え歌みたいな感じ。みんなも替え歌したこある？口説を一緒に作ってみたい。 4月から新しい学校になるよね。後谷小学校での1年を振り返って即興で口説を作ってみよう。 春は桜が咲くね。早稲田公園とか行く？ ＼春は桜がキレイだな　ドキドキワクワクの新学期　隣の席は誰だろう」のような感じで、夏、秋、冬も作ってみよう。 学校での出来事や何を思ったかを自由に言ってみて。 夏の出来事は？プール！秋は何をした？市内の音楽会！冬は私たちが来たことを口説にいれよう！＼冬は沖縄の音楽が 後谷小学校にやってきた」。沖縄の音楽を聴いてどう思った？ 最後は、後谷小学校での思い出を入れよう。門をくぐったら何が見える？時計塔！５年間の思い出や気持ちは？ 口説にタイトルを付けてみよう！みんなで読んでみよう！ それでは楽器を演奏しながら歌ってみる。同じメロディの繰り返しなので、耳が慣れてきたら一緒に歌ってみて。	スタッフ：ホワイトボード（事前に準備した穴埋め方式の模造紙を貼付）を舞台中央に移動 町田：模造紙に記入
37’ 49	M5（2’ 12） 《5の1　後 谷 口 説》	歌三線、琉球箏、琉球笛	
40’ 01	MC5（1’ 05） 棚原：挨拶、児童へのメッセージ	口説つくり楽しかった？ 私も沖縄の音楽が大好きで、みんなにたくさん紹介したいと思っている。三郷にも独自の音楽や文化がある。この機会に目を向けてみてほしい。 あと少し時間がありそうだからみんなで沖縄の踊りをやろう！	
41’ 06	AC（3’ 23） 《カチャーシー》	大城：カチャーシーはかき混ぜるという意味。おめでたい時によく踊る。めでたさを共有して楽しくなろうね、という曲。（大城の指導で2段階に分けて踊りの練習、棚原の歌三線に合わせて全員で実演）	
44’ 29	MC6（0’ 10） 棚原：挨拶	またみんなとの楽しい時間を持てることを楽しみにしている。ありがとうございました。	
44’ 40	退場	ホール担当者白石さんの挨拶、拍手にて退場 担任の挨拶、児童退場、演奏者は廊下でお見送り	スタッフ：扉介助

実施団体：公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団
実施時期：令和６年１月11日（木）～令和６年１月13日（土）
出演アーティスト：川田健太（箏・三絃）　谷富愛美（箏・十七絃）　風間禅寿（尺八）

アクティビティ

タイトル：新春　邦楽ミニコンサート
期　　日：令和６年１月11日　11:00 ～ 11:45
会　　場：トリエ京王調布３階こもれびテラス
参 加 者：一般客25名

2017年にオープンした大型複合商業施設。「調布らしい“ちょっとステキ”な生活」をコンセプトにした賑わいのランドマーク。新しく市民が集い行き交う施設での新春邦楽ミニコンサート。流行曲に始まり、季節の曲、古典、現代曲など６曲を演奏。コミュニケーションを取りながら、生活の中で身近に邦楽を体験した。

タイトル：新春　邦楽ミニコンサート
期　　日：令和６年１月11日　14:00 ～ 14:45
会　　場：トリエ京王調布３階こもれびテラス
参 加 者：一般客30名

アクティビティ①での振り返りを行い、開演前の演出、MCの声、爪の見せ方、双方向のコミュニケーションなど改善して①と同一プログラムで実施。参加者とさらに良いコミュニケーションを取りながら、参加者の関心を引きつけ、終演後も楽器に触れるなど交流することができた。

タイトル：ようこそ和楽器の世界へ
期　　日：令和６年１月12日　10:10 ～ 11:00
会　　場：調布市文化会館たづくり２階くすのきホール
参 加 者：東京都立特別支援学校中学部１年生21名

徒歩圏内にある東京都立特別支援学校中学部１年生（軽重度の知的障がい）を招いてのインリーチ。障がいのある子どもたちにとって、将来、公共劇場が生活の一部となることを目指し劇場と学校で行っている取組の一環で、本事業でも実施。聞きなじみのある曲（校歌）から導入し、パネルを使った音あてクイズや砧をたたく動きで音と体をシンクロさせる体験で自主性・自律性を促すことや、和の音で古典、現代曲などを楽しむことができた。

タイトル：ようこそ和楽器の世界へ
期　　日：令和６年１月12日　13:30 ～ 14:20
会　　場：調布市文化会館たづくり２階くすのきホール
参 加 者：東京都立特別支援学校中学部３年生27名

徒歩圏内にある東京都立特別支援学校中学部３年生（軽重度の知的障がい）を招いてのインリーチ。障がいのある子どもたちにとって、将来、公共劇場が生活の一部となることを目指し劇場と学校で行っている取組の一環で、本事業でも実施。聞きなじみのある曲（校歌）から導入し、パネルを使った音あてクイズや砧をたたく動きで音と体をシンクロさせる体験で自主性・自律性を促すことや、和の音で古典、現代曲などを楽しむことができた。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：郷の音でめぐる　ちょうふ八景　いまむかし
期　　日：令和６年１月13日　14:00 ～ 15:45
会　　場：調布市文化会館たづくり２階くすのきホール
参 加 者：211名

多摩川や神代植物公園などの豊かな自然の恵みに加え、深大寺、布多天神社など由緒ある寺社も多く、さらに実篤公園・武者小路実篤記念館などの見どころも随所にある。昭和60年に選ばれたちょうふ八景（16か所）に加え、今、旬の調布の風景を公募し、新風景も加えた景色（映像）とともに、それらにインスピレーションを受けた、古典、現代曲で綴るコンサート。比較的若年層の参加もあり、約45％が「初めて、またはほとんどは初めて」という回答。若い実演家の演奏による調布の資源を生かした内容で多くの市民の参加を促すことができた。

ホール担当者の意見・評価
芸術振興事業課　渡部　和哉

①　応募の動機・事業のねらい

クラシック音楽をメインとした調布国際音楽祭は、若きプロデューサー（芸術家）のもと10年で４千万円規模の事業に成長し、公共ホールと周辺地域に賑わいを創出している。その中で市民はもとより、地元の資源でもあり将来を担う桐朋学園大学音楽部門の多くの学生が関わってきた。一方で、邦楽の分野でも市民の主体的な活動は盛んで、箏、尺八、長唄、三味線などの邦楽の多くは、地域に縁があるお師匠さんたちによって体系的に組織され、流派の発表会の開催、市民文化祭なども含め当法人でもサポートを行っている。今後一層、邦楽の分野でも公共ホールの活性化と地域における人材育成、芸術活動の環境づくり、継承、賑わい創出にあたっては、幅広いフィールドで活躍を目指す若いアーティストの活力にあわせて、地元の資源でもある桐朋学園芸術短期大学日本音楽専修の学生との新しい連携が重要と考えた。本事業を活用して、公共ホール職員の企画・制作能力向上とともに、将来を担う学生が芸術家としての能力と、公共ホールとともに豊かな地域を創造するための能力を向上させること。また、質の高い芸術鑑賞の環境整備と地域課題の解決に取り組める公立文化施設を目指していきたいと応募した。

あまり自主事業で取り上げられることのなかった邦楽であるが、日本人の生活に深くなじみのある音楽として日本文化と地域にフィーチャーし、コーディネーター、若手実演家のもと、ホール職員が創意工夫、試行錯誤、学びと振り返りを行い、地域資源を活用しながら、今後継続的に自走できるノウハウを身につけることを目標とした。

②　企画のポイント

アクティビティ①②は新しい市民のコミュニティロケーションにて実施。劇場に来場することなく、何気なく過ごす日常の中で生の邦楽と若い実演家に出会えるシチュエーションを演出した。流行曲に始まり、季節の曲、古典、現代曲など６曲を企画。コミュニケーションを取りながら、生活の中で身近に邦楽を体験できるアウトリーチを目指した。

アクティビティ③④は徒歩圏内にある特別支援学校中学部生徒を招いての劇場内インリーチ。市内に音楽大学もあり、特別支援学校へのアウトリーチによる演奏は比較的あるが、劇場に来場する体験はない。社会参加、地域で生きるを目標に掲げる学校と「新しい広場」を目指す劇場による取組。聞きなじみのある曲（校歌）から導入し、パネルを使った音あてクイズや砧をたたく動きで音と体をシンクロさせる体験で自主性・自律性を促すことや、和の音で曲を楽しむことができること、コミュニケーションを取ることを目指した。

ホールコンサートは、地域資源が多く悩まされたが、身近な景色や場所、ユニークベニューを企画に組み込むことで、誰にとっても本事業が自身の関心事になるようにした。それぞれが勧めたい風景写真を募集し、邦楽に関心が薄い層だけではなく、若年世代には気軽にスマホで撮影した写真でも応募ができるようアプローチを広げた。映像をつなぐことで、新春に伝統的な邦楽を鑑賞するという価値に、自身が住むまちの知らない名所巡りを楽しむことができるという付加価値をつけることで、多くの参加を促した。また後半部は現代曲を中心に照明だけの演出で純邦楽にはない邦楽の魅力を伝えるようにした。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティ①②では小学校アウトリーチとは違い参加者層の幅が広いこと、誰でも参加できることからホールコンサートに使用するプログラムとの兼ね合い、進行、曲目やトーク（コミュニケーション）、ただのミニコンサートにはならない“自分ごとになる体験”のプログラムに悩まされた。

アクティビティ③④は、演奏者が障がい者向けのアウトリーチ経験がほぼない状態であったため、効

果的なプログラム、接し方、アプローチの方法などから検討する必要があった。参加者の心をわずかでも揺らすプログラムに最後まで悩まされた。

ホールコンサートでは、曲目と風景のマッチング作業が必要であったこと、また劇場担当者に曲が持つ情景や様子、曲のイメージなどの知識が乏しかったため、曲目でコンサートのストーリーを描くことができなかった。また、曲と風景（映像）の同期や、曲の情景、調布の風景なども含めトークパートをどう膨らませるかなど、土地勘がない出演者が演奏以外のパートで如何に演出できるかなどで悩まされた。

④　上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーターからのアドバイスを中心に、曲選定によるプログラム見直しを何度も行い、曲から曲、間に入れるトークとのつなげ方、台本の推敲などを重ねた。支援学校の生徒向けプログラムに関しては、「子供のための伝統文化・芸能体験事業」（アーツカウンシル東京・芸団協）など支援学校向けのプログラムにホール職員が視察に行き、さまざまな手法を学び共有することでプログラムに生かすことができた。

最終的には各日前日の通し稽古での最終調整を通して、チーフコーディネーター、コーディネーター、ディレクターなどの適切なアドバイスと、稽古のたびに内容が上達する演奏者の潜在能力によって良い結果を生み出すことができた。

⑤　事業を実施しての成果

何より、何からはじめてよいかわからなかった邦楽事業に着手できたことが良かった。地域のお師匠さんや各協会の実演家が市内で活躍する中、プロとはいえ市外の若手演奏家を招聘しての実施には幾分か躊躇する思いもあった。しかし、芸団協をバックグランドにする谷垣内先生のコーディネート、アドバイスなどによって、一つのモデルケースができたことは、今後、邦楽事業を実施していく中では大きな財産になった。アウトリーチも含め、その理論やアプローチ法、調布の観光、桐朋学園芸術短期大学日本音楽専修の学生などの多くの地域資源の活用を意識して事業の企画をすることで、実演家とともに課題を共有し解決していく能力、文化芸術だけではなく地域性のある事業の企画力を高めることができた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

一点目、アクティビティ①②について、小学校アウトリーチなどと異なり、劇場や日常の生活で邦楽を聴かない方に向けたフリースペースでの実施であったため、ホールコンサートとの曲目などに調整を要したこと、また参加者が重複しないように広報、宣伝を控えめにしすぎたことから、思いのほか集客に焦りを感じた（結果として人数は及第点）。二点目、桐朋学園芸術短期大学日本音楽専修の学生と連携するきっかけにはなったが、有機的な連携までには至ることができなかった。プロを目指す学生が劇場の事業や若手実演家の活動を学ぶことで、学生や地域にとって新しい実りをもたらす事業の進め方の構築に引き続きトライしていきたい。

三点目、ホールコンサートでは地域資源を意識した企画づくりに努めたが、短期的にはまちづくりにつながる成果がみえてはこない。劇場法で求められる「新しい広場」として、地域コミュニティの創造と再生を通じて地域の発展を支える機能が発揮できるよう、主体的に関わる市民、団体を増やすことで実現を目指していきたい。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

音楽、芸能、演劇、美術などがもつ文化芸術の本来的な価値に加え、地域資源を活用することで、地域コミュニティの活性化、人と人、人と地域のつながりを形成することなど、社会的な価値を創造することができる。公共劇場の意義の一つは、文化芸術事業をとおして、人が人として豊かに暮らすことができるよう、まちづくり、社会づくりに資することである。地域の人、地域の資源によって、地域に住むすべての人にとっての価値をつくりだせる劇場であること、地域の人の拠り所となる劇場を目指していきたい。

コーディネーターレポート
谷垣内　和子

■特別な年の幕開けに和の響きを

2024年1月1日、数千年に一度という大地震が能登半島を襲った。翌日には羽田空港で航空機衝突炎上事故が発生。お正月気分は一気に吹き飛んだ。10日後の1月11日、調布市で今年初めての「公共ホール邦楽活性化事業」がスタートした。

公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団は、文化会館たづくり（くすのきホール、むらさきホール）、グリーンホール、せんがわ劇場の3つの文化施設を擁する。新宿から京王線特急で17分。調布駅から徒歩数分という恵まれた場所に位置する。

担当するのは登録アーティスト2年目の川田健太さん（箏・三絃、山田流）をリーダーに、谷富愛美さん（箏・十七絃、生田流）と風間善寿さん（尺八）が加わったチームだ。川田さんと谷富さんは、流派は異なるが、ともに洗足学園音楽大学で現代邦楽を学んだ同窓生であり、風間さんは調布市民という条件が整った。

■２つのアクティビティ・プログラム～地域との関係性強化を目指して

①　“トリエ京王調布”での取り組み

京王線調布駅直結のショッピングセンター 3階東端、若者向けファッションを扱うショップが並ぶエスカレーター際に「こもれびテラス」がある。横6.5m×縦4.5mのコンパクトなスペースで、天井は4階への吹き抜けになっている。ここで財団が関わる事業を行うのは初めてという。

ホールから持ち込んだ赤とグレーのパンチカーペットを敷き詰めてステージ（3間×1.5間）とし、周囲に30席ほどの椅子を並べる。箏・十七絃各1面と尺八のみで、ノリの良い《紅蓮華》からスタートした後、被災地への思いをこめた《さくら～祈り》以下、《千鳥の曲》《Kのための斗為巾》《鶴の巣籠》《エルサルバドル》と続けた。

初回は集客に苦労したが、直後に関係者全員で振り返りを行い、それぞれに対応策を検討。急遽簡易チラシを作って配布するなどしたところ、2回目はそれなりの来場者を得た。ホールから至近距離のメリットは大きい。お正月明けのタイミングで、普段あまり邦楽を聴く機会のない若年層に届けたいという思いがあり、当初はショップの従業員も視野に入れていたが、この点はあまり現実的ではなかった。

商業施設での一過性のイベントに留まらない意義を見出すには至らなかったが、今後につながるきっかけづくりにはなったのではないか。アーティストにとってもオープンスペースでの貴重な経験になったことは確かだ。

②　ようこそ、和楽器の世界へ！

2つ目は、市内にある都立の特別支援学校の生徒をくすのきホールに招いてのミニコンサート。日頃ホールに足を運ぶ機会がない子どもたちに、ホールを身近に感じ、和楽器の世界を楽しんでもらいたいという思いがこもる。タイトルはサブコーディネーターの林真智子さんのアイディアによるもので、会場にはポスターも掲示され、子どもたちを招き入れる心づくしが垣間見えた。

プログラムは《校歌》から始め、楽器紹介・連想クイズ、《千鳥の曲》《きぬた》《エルサルバドル》と続いた。校歌は生徒たちの緊張を和らげるのに効果的だった。楽器紹介は「何の音？」クイズ以下、《千鳥の曲》で波の音や千鳥の鳴き声などの選択肢を示して回答を求め、全部正解とする手法は昨年度を踏襲したもの。そのほか体験的要素として「きぬた」のリズムを一緒に打ち、子どもたちの聴を打つテンポの変化に従って箏の演奏速度が変わる試みを行った。

クイズは有効な手法だが、だれもが納得できる答えにたどり着けないと少しモヤモヤする。とくに象

徴的な表現手法が多い古典曲では具体的なイメージにつながり難く、今ひとつ腑に落ちない思いが募る。この部分はもう少し検討の余地がありそうに思う。

■ホール公演について～調布の多彩な文化資源を活用

既存の「和を紡ぐシリーズ」の一つに位置づけて「伝統音楽で御座い！」と名づけ、公演タイトルは「郷の音でめぐる　ちょうふ八景　いまむかし」と題した。その背後には、この公演に際して、1985年選定の「ちょうふ八景」に加えるべき「新八景」の写真を公募し、出演者と選定して演奏中に公開するというアイディアがあった。

プログラムは、前半と後半とで古典と現代曲を対比させる構成。演奏の仕方（座奏と立奏）や衣装（和装と洋装）の変化が分かりやすい。前半では《春の海》《四季によせて》《鶴の巣籠》《飛躍》《冬の曲》を取り上げ、背後のスクリーンに「新ちょうふ八景」の風景写真を映し出して、演奏と写真をセットで楽しむ趣向。後半は《鳥のように》《海鳴り》《壱越》《エルサルバドル》と並べ、照明も工夫した。箏と十七絃、三絃、尺八の組合せを少しずつ変えて、各楽器のソロから歌のある曲まで多彩な魅力が味わえるように心がけた。

前半のスライドショーは曲の雰囲気や季節感を勘案して写真を選定。そのなかで冒頭の《春の海》は、パラアートの作品を使用して未来への希望を託す思いを重ね、尺八独奏《鶴の巣籠》では逆に写真は使用せず、比較的単純な旋律の繰り返しが多い《飛躍》ではいろいろな写真を楽しめるように配列した。スライドの同期操作には苦労もあったが、写真と音楽との共演は思いのほかメリハリのある構成になったと思う。

手話通訳が導入されたのも今までにない試みだった。事前に用意した完全台本は、前日のリハーサルを経て大幅に手直しが続出。結果的に当日は、現場力を活かして専門用語を極力減らしたトークを心がけることになった点は怪我の功名というべき。93％の人が満足したというアンケート回答を目にしてホッとする思いだった。

■今回の取り組みの特色～カギを握った豊富な経験と明確なビジョン

『万葉集』に歌われた「多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだかなしき」に由来する”たづくり”。長唄や箏曲などでもお馴染みのテーマだ。豊かな自然と歴史に恵まれた調布市は、多摩川はもちろん、野川の桜、深大寺、神代植物公園、ゲゲゲの鬼太郎、映画の街等々、多彩な文化資源に満ちている。

今回は、経験豊富で行動力のある渡部和哉さんが積極的に関わり、いろいろなアイディアとリクエストを出してくださったことが大きな推進力になった。五十子認さんもフォローの手を緩めずに最後まで伴走してくださった。彼らが明確なビジョンをもっていたことが、ブレずに最後までたどり着けた最大の理由だと感じる。邦楽もクラシックも演劇も、フラットに捉えられる姿勢は頼もしい。

日本国内の邦楽公演の約半数が集中する東京で、公立文化施設主催の若手邦楽アーティストの演奏会にどれほどの集客が見込めるのか。どのような付加価値を工夫できるかが、成否のカギを握る。今回の取り組みで注目できるのは文化資源の活用である。

例えば、既存の「ちょうふ八景」に対して「新ちょうふ八景」を公募して市民の関心を引く。アーティストの一人が市民であることを広報や集客に有効活用（『市報ちょうふ』1月号で地域出身の若手の活動紹介に登場したほか、神代植物公園でのお正月の邦楽公演に出演者本人がチラシ配布）。地元の芸術短大の日本音楽専修学生に舞台転換で協力を依頼する等々。複数のフックを用意した。しかも一回きりの

取り組みではなく、邦楽を切り口に、地域との多角的な関係性を探り、将来につながるきっかけづくりを意識していた点に注目したい。

2か所でのアクティビティとホール公演の演奏曲は極力重ならないようにしたい。特別支援学校の生徒へのインリーチでは体験的要素も欲しい。お正月らしさ、邦楽のイメージにつながる華やいだ曲も欲しい。軽やかな息を抜けるシーンも欲しい。渡部さんの豊富な経験から繰り出されるリクエストは、共有レパートリーに制約を抱えるアーティストたちにとっては少し負担だったかもしれない。けれども選曲を含め、柔軟な対応に努めた経験は、きっと今後に役立つに相違ない。この事業を共に進めてくださった関係者の皆さまに改めて感謝を申し上げたい。

アウトリーチ進行シート（東京都　調布市）
林　真智子（サブコーディネーター）

実施日	令和６年１月12日
実施先	調布市文化会館たづくり　くすのきホール
対象・実施先の情報	東京都立調布特別支援学校 （【午前】中学部１年生：21名【午後】３年生：27名）
出演者（編成）	川田健太（箏）、谷富愛美（箏・十七絃）、風間禅寿（尺八）
ねらい／目標	ホールを訪れることが難しい支援学校の子どもたちをホールに招き、芸術や伝統音楽を「自分ごと」として身近に受け止めてもらう機会とすることをねらいとする。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	事業担当・渡部さんによる子どもたちへの挨拶・出演者の呼び込み（1分）	子どもたちを渡部さんが客席へ誘導して挨拶。 ホールに来てくれたお礼や、これから邦楽を楽しんでもらう時間であることをみんなに伝えて、出演者を呼び込む。 出演者は下手側から登場。	舞台前方を客席と同じ高さに下げてステージとして使用 舞台下手にインリーチのタイトルを掲示 中央にホワイトボードを設置
1：00	校歌演奏（2分）	最初に箏、十七絃、尺八で校歌を演奏。 演奏終了後「何の曲か分かった？」など、子どもたちとのやり取りを始める。	箏、十七絃、尺八
3：00	自己紹介（1分）	インリーチのタイトルを「ようこそ、和楽器の世界へ」とし、身近に開かれたイメージで開始。 出演者の自己紹介。３人それぞれ自分のニックネームを決めて「◎◎と呼んでね」と出演者と鑑賞者の垣根をなくすようなリラックスした雰囲気を創出。	川田さん、谷富さん、風間さんの順に自己紹介
4：00	楽器紹介（6分）	箏、十七絃、尺八の順にそれぞれの楽器を紹介。箏は縦に立てて大きさを実感してもらう。尺八は竹でできていることなどを説明し、長短の尺八を聴き比べ。 それぞれ自分がその楽器の好きなところも話す。	箏、十七絃、尺八
10：00	連想クイズ（7分）	「これから出す音が、何の声に聞こえるかな？」と子どもたちに投げかける。用意したイラストから正解だと思うものに対し、挙手してもらう。 箏、尺八で表現する生き物を当てる（箏＝蜩、尺八＝鶴）。具体例の「鶴の巣籠」（２分）を演奏後、風景を表現する例として「千鳥の曲」を取り上げ、同様に三択クイズ。正解は「全部正しい」と種明かし。	箏、尺八 回答の選択肢のイラスト（２～３枚＝２～３択）をホワイトボードに掲示
17：00	MC（1分） 千鳥の曲（5分）	（クイズ終了後）「音の感じ方はみんなそれぞれだね」「いろんな音に聞こえるね」「自由にいろんな景色を思い浮かべながら聴いてみてね」と話して演奏。 （演奏後）「みんなが普段聴いている音楽とは違ったかな？」	箏
23：00	リズム体験（6分）	砧のイラストを用意し「これ何かわかる人いる？」「昔の人が布を柔らかくするために使った道具だよ。これをたたくときに出る音を取り入れた『きぬた』という曲があります。次は音に合わせて、一緒に体を動かしてみよう」 砧を打つリズムに合わせて膝をたたいてもらう。 リズムに合わせやすいように、ゆっくり目で始めて箏を一緒に弾いてみる。続いてテンポの速いパターンにも挑戦。	箏２
29：00	きぬた（4分）	テンポの違いを「おばあさんの砧」「お母さんの砧」にたとえて理解を促し、「心の中でトントンと感じながら聴いてみてね」と曲に繋げる。	箏２
33：00	MC（2分） エルサルバドル（4分）	「僕たちが大好きな曲を紹介します。エルサルバドルという曲です。サッカーとかで聞いたことあるかな？これまで聞いてもらった日本のリズムとは違う曲の雰囲気を楽しんでね。自由に体を動かしてもいいよ」	箏、十七絃、尺八
39：00	MC（1分）	（「エルサルバドル」終了後）「どの楽器がカッコよかった？」生徒の感想を聞いた後、「今日は僕たちが大好きな日本の楽器の音を聴いてもらえて嬉しかったです」「これでおしまいです」 渡部さんに進行を渡し、手を振って退出。 ＊１コマ50分。ただし内容は余裕をもって40分程度の構成	終了後はホール出口へ移動し、子ども達の退場を見送る

実施団体：公益財団法人長浜文化スポーツ振興事業団
実施時期：令和６年３月７日（木）～令和６年３月９日（土）
出演アーティスト：川田健太（箏）　谷富愛美（箏）　風間禅寿（尺八）

アクティビティ

タイトル：木之本小学校４年生
期　　日：令和６年３月７日　11：30 ～ 12：15
会　　場：長浜市立木之本小学校　３階音楽室
参 加 者：31名

活発な子供たちで、川田さんの問いかけにも反応が良く、「お箏の絃はどこで作ってるか知ってますか」に「丸三ハシモト！」と答えてくるレスポンスの良さがあった。終演後サインを求めてくる子供たち。アーティストをカッコよく思ってくれたように思えた。

タイトル：木之本小学校５年生
期　　日：令和６年３月７日　13：55～14：40
会　　場：長浜市立木之本小学校　３階音楽室
参 加 者：36名

４年生に比べて落ち着いた雰囲気はあったが、一緒に手拍子をするあたりから、立ち上がって踊る子が出てきたりして打ち解けた。最後生徒の代表がコメントしてくれるシーンで、テンポの良い曲があって驚いたとの感想を言ってくれた。

タイトル：湖北会「やまぶき」
期　　日：令和６年３月８日　10：15～11：00
会　　場：湖北会「やまぶき」 食堂
参 加 者：35名

知的障害の方々であったが、音楽はお好きなようでしっかり鑑賞してくれた。職員の方が献身的について下さり。比較的出入りも少なくじっくり聴いていただけたかと思う。芸術は感性の世界なのでもっとこういう機会があっても良いはず。そう思わせるアクティビティであった。

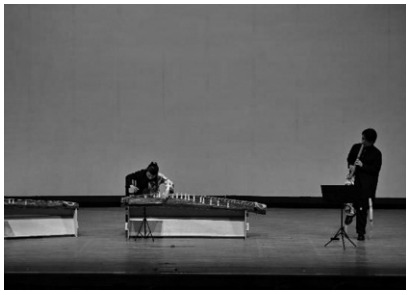
タイトル：長浜市立「湖北病院」
期　　日：令和６年３月８日　14：30～15：15
会　　場：長浜市立「湖北病院」 新館ロビー
参 加 者：50名

入院患者の方を中心にたくさん集まっていただいた。多くは車いすのまま、パジャマのままであった。このように絶対にホールに出かけて鑑賞をすることなど不可能な方々に、音楽に触れる機会を設けられたことに大きな喜びを感じた。まさにアウトリーチだと思った。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：コンサート「シン・ホウガク」
期　　日：令和６年３月９日　14：00～16：00
会　　場：木之本スティックホール
参 加 者：114名

コンサートにアウトリーチ先の小学生が20名以上来てくれた。彼らが出演者たちをカッコいいと思ってくれたのは思惑通りで、目指した成果を得られたと思う。一方で一般のお客様も現代邦楽に理解を示して下さったと思われ、いつもとは違った邦楽の世界を示せたかと思う。ロビーにて丸三ハシモトさんの映像紹介や製造工程の写真パネルを掲示できたのも良かった。



ホール担当者の意見・評価
木之本スティックホール　加藤　哲

①　応募の動機・事業のねらい

地場産業である和楽器弦の製造とリンクさせた内容で、邦楽普及の促進を図りたい。全体的に邦楽器演奏のリスナー発掘を主眼とした企画軸をもって取り組みたい。

②　企画のポイント

アクティビティ：子供達には若くて等身大なアーティストがかっこよく邦楽器を演奏する姿を見てもらい、興味を持たせる内容。福祉施設や医療施設においては日ごろ体験できない生演奏の体感を軸に、邦楽演奏の楽しみを実感いただく内容。コンサート：現代邦楽を中心に、若い世代に響くような内容を企画。広報、打ち出しも従来の邦楽の枠からはみ出た新しい感覚のものを模索し、インパクトある公演に仕上げたい。アクティビティの様子や丸三ハシモト（和楽器弦製造会社）の紹介をロビー展示などで盛込みたい。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アウトリーチ先について、木之本小学校と他のどこかを、当初、伊香具、永原、塩津といった北部でかつ小規模なところを視野に入れたが、日程調整がつかなかったり、既に邦楽のアウトリーチを済ませていたりして、訪問先の決定に苦労した。

また、現代邦楽を打ち出すにあたりチラシのデザインや、タイトル決定に悩んだ。

④　上記③をどのようにクリアしたか

アウトリーチ先の小学校に関しては木之本小学校が２学年予定に組んでくださったので解決した。比較的校長先生とコミュニケーションがとれていたのが幸いした。

チラシ作成については、どうしても洋装の写真にしたかったので、このメンバーの調布での公演後に写真をたくさん撮っていただきそれを使った。デザインは地元のプロの方にお願いした。結局タイトルは間際まで決められなかったが、「シン・ホウガク」という一案を出してみてチラシ案を作成いただいたらしっくりいっていたと思い、それを採用した。

⑤　事業を実施しての成果

一番近い地元小学校でアウトリーチが開催できたのは良かった。障害者施設や病院も共生社会や社会包摂の観点からも公共ホールとしてアウトリーチ活動ができたのは良かった。特に湖北病院はかねてより院長から要望もあったので、今後の道筋もできたと思う。

コンサートはもっと広報に力を入れておけばと反省点も多いが、有料の邦楽コンサートでここまで集客できたことは大きいし、アウトリーチ先の小学校でアクティビティを受けた1/3の生徒が来てくれたのは大きい成果だと思う。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

コンサート広報について、どうしても内容吟味がアーティストやコーディネーターと打ち合わせを重ねて決めていく過程で時間がかかり、遅きに失したことが反省点。

また、邦楽事業において舞台転換において楽器屋への委託がうまく出来なかったことは、当日のコンサート運営にご負担をかけた。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

地域コミュニティとの文化的コモンズを構築していく上で、「ほうかつ」「おんかつ」は欠かせない事業だと感じた。特に長浜市は学校アウトリーチにおいてホールを絡めた実施となっていないので難しい側面がある。今回は木之本小学校でしか学校アウトリーチはできていないが、他の学校に話を持ち掛けに行くだけでもある程度コミュニケーションが取れて良かった。そのことが今後の自主公演の集客などに影響していくと思う。

丸三ハシモトの存在はやはり大きく、木之本にあるホールとしてはそのことを十分認識していなければならないことを改めて痛感しました。

コーディネーターレポート
大久保　真利子

公益財団法人長浜文化スポーツ振興事業団が運営する、滋賀県長浜市木之本町「木之本スティックホール」が拠点である。アーティストは川田健太さん（箏、十七絃）をリーダーとし、谷富愛美さん（箏、十七絃）と風間禅寿（ぜんじ）さん（尺八）というメンバーで、川田さんにとっては2022年度から２年間にわたって登録アーティストとして活動するなかで最後の事業となった。

■基本方針

木之本には、和楽器で使用される絹糸の生産で有名な丸三ハシモト株式会社がある。いわば邦楽と関係が深い同地で唯一の公共ホールが、木之本スティックホール（以下、スティックホール）である。担当者は館長を務める加藤哲（あきら）さんで、これまでも自主事業として邦楽の演奏会を何度も行っておられる。だからこそ加藤さんは邦楽の将来に危機感を持ち、とくに若者層をターゲットとした新たな愛好者や観客を獲得するためには、現代邦楽が相応しいのではないかとの意見をお持ちだった。このことは、古典的な邦楽よりも現代邦楽の方が集客の点で優れているということを仰っているわけではなく、邦楽に対するマイナスイメージを払拭し邦楽の魅力をより強く伝えるためには、比較的新しい楽曲によるプログラム構成が適しているとのご意見だと拝察した。もちろん、現代邦楽のプログラムを組むだけでなく、観客を惹きつけるための不断の努力や工夫が必要であることは言うまでもない。このことについてリーダーの川田さんとも話を重ね、現代邦楽に軸を置いたプログラムで臨むこととした。

■本番まで

スティックホールでの事業は10月下旬のオンラインミーティングからスタートし、12月中旬に下見を行った。アウトリーチ先に決まった木之本小学校、障がい者施設「やまぶき」、湖北病院の３会場、ホール公演を行う大ホールの下見のほか、各施設の担当者などと打ち合わせをし、アーティストもスタッフも本番のイメージを膨らませた。

そのほか加藤さんのご配慮により下見の合間で、長浜市や木之本のことを深く知ることができたのも大変大きな収穫であった。たとえば丸三ハシモトを訪問し、会長さんのご案内で絹糸の製造工程の見学のほか、邦楽器界をめぐる近年の動向を伺うなど大変貴重な機会を得た。また地域住民が共有できる事柄（地元ネタ）として「サラダパン」や、長浜市民は誰もが口ずさめる曲として《琵琶湖周航の歌》があるということなどを教えていただいた。これらは本番時のMCやプログラムなどに大いに活かされた。

またホール公演の広報についても下見前後に本格的に動き始めることが多い。スティックホールでは、地元の広報誌への掲載のほか、公演のチラシを作成することとなった。加藤さんの発案による公演のタイトルは「シン・ホウガク」。近年「シン」を冠するアニメや映画などがあるが、新だけでなく真・深・心など、観客がそれぞれの「シン」を見つけて欲しいとの思いを込めたそうだ。またチラシ裏面には、漢字ばかりになりがちなプロフィールを避けアーティストからのメッセージを記すことにした。後述するが、これがとくに小学生の心を掴んだようである。

■アウトリーチ

全４回のアウトリーチは９歳から高齢者まで大変幅広い年齢層が対象だった。

１日目は木之本小学校の４年生と５年生である。自由に感じていいんだよ、身体を動かしながら聴いてもいいよとの声かけに、立ってリズムをとる児童も見受けられ楽しく参加する様子が印象的だった。また終了後、アーティストが廊下でお見送りする傍らで、加藤さんがホール公演のチラシを手渡ししてくださったのだが、チラシ裏面の演奏者からのメッセージに目を通す児童が多かったそうだ。マンガの

吹き出しのようなデザインも相まって児童の興味を喚起したのだろう。実際にホール公演に足を運んでくれた児童もいた。

また２日目は施設と病院でのアウトリーチだった。施設は10代～70代の通所利用者、病院は入院患者や系列の高齢者施設の入所者が対象だった。両会場とも車椅子や介助が必要な方が少なからずおられ、会場への誘導などご協力いただいた職員の方々に心から感謝したい。プログラムでは手拍子や《琵琶湖周航の歌》をみんなで合唱するなど、参加していただくパートが好評だった。施設や病院でのアウトリーチについては、スティックホールを核とした地域の文化的コモンズを形成したいという加藤さんの強い思いから実現したものである。本事業によってきっかけづくりのお手伝いができたなら幸いである。

■ホール公演

ホール公演当日は雪が舞うなかの開催だったが、あまり出足に影響しなかったのが幸いだった。スティックホールのロビーでは、丸三ハシモトによる絹糸の製造工程のパネル展示およびPR動画の放映などご協力を賜った。

公演は、軽快なリズムが特徴的な《エルサルバドル》で幕開けし、前半は《OKOTO》《薄暮》《十七絃二面のための一章》、休憩を挟み後半は《My Favorite Things》《潮流》《風の歌》《春雨クライシス》という構成だった。アンコールは風間さんの歌唱による《琵琶湖周航の歌》で、１～３番までをホールに集う全員で歌唱し和やかに終演した。

ホール公演で箏や十七絃などを使用する場合には、使用楽器の交換や調弦にともなう転換の問題が発生する。本公演でも大変多くの転換が必要であった。そこで当初、地元の和楽器屋さんにお願いする予定だったが他用と重なりNG。そこで和楽器サークルや愛好者に依頼したもののいずれもお断りの返事だったようだ。結局、やむを得ず加藤さんおよび地域創造スタッフという４名体制で転換を行った。今回のように和楽器屋さん以外が楽器転換を担うことも可能であろうが、大切な楽器に触れることになるため、アーティストの理解や協力のほか、十分に準備やシミュレーションの時間を確保できる場合に限り実現可能であることを附言しておきたい。

■おわりに

スティックホールでの事業は、加藤さんが同地で築いてこられた人脈や地元愛などに大いに助けられたように思う。事業内容の充実や運営など日々の業務において大変なご苦労があることは承知しているが、ホールや担当者がその地に根付き地域コミュニケーションの輪のなかに入ることで、ホールの活性化と地域の文化振興に好循環をもたらすことをあらためて感じた。

アウトリーチ進行シート（滋賀県　長浜市）
田中　舞（アシスタント）

実施日	令和６年３月７日（木）
実施先	長浜市立木之本小学校
対象・実施先の情報	対象：全校生徒（４年）31名 場所：音楽室
出演者	川田健太（箏）、谷富愛美（十七絃）、風間禅寿（尺八）
ねらい/目標	自然を邦楽器で表現し、邦楽を通してふるさとの自然に目を向ける

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	Ｍ１　My Favorite Things (3：02)	川田健太（箏）・谷富愛美（十七絃）・風間禅寿（尺八）	・舞台左から箏、十七絃、尺八 ・川田、谷富が先に入って演奏 ・途中で風間が後方より演奏しながら登場
3：02	・Ｍ１の説明 ・自己紹介 ・箏の紹介 ・Ｍ２の導入 (5：50)	・今演奏した曲は知っていますか？「ドレミの歌」が登場する映画で使われていた曲です。 ・今日は私たちのお気に入りの楽器で、自然の音を演奏し、みんなの周りにもある自然を大事にしてもらいたいと思います。 ・川田、谷富、風間の順で自己紹介 ・お箏、箏柱の紹介 ・ちなみに箏の絃はどこで作られているか知っていますか？そう、ここ木之本で作られています！ ・調絃を聞いてもらって、音のちがいを感じてもらう。 ・箏が自分のお気に入りの楽器になった理由は、振動や響きが体に伝わって来る感じや、自然や人の気持ちを言葉を使わないで表現できるから。みんなと同じ小学生のときに体験教室に行ってみて、箏を習い始めたのがきっかけです。 ・次は、箏で潮の流れを表現した曲を演奏します。長浜で見た琵琶湖の風景も思い浮かべながら演奏するので、色々な琵琶湖の景色を想像して聴いてください。	MC：川田 ・箏の紹介の際、川田が前に出て、風間が箏、谷富が十七絃を前に持っていく。立てて長さの違いも見せる。 ・「箏柱」の説明にフリップを用いる。 ・箏の紹介後、そのまま風間、谷富による楽器転換。 ・「潮流」のタイトルにフリップを用いる。 ・風間、谷富は、十七絃、尺八を持って袖へ。
8：52	Ｍ２　潮流 (3：41)	川田健太（箏）	・箏を真ん中に配置
12：33	・Ｍ２の説明 ・尺八の紹介 ・なぜ作曲するようになったか ・Ｍ３の導入 (4：13)	・色々な琵琶湖の景色を感じてもらえたかな。次は尺八で自然を演奏します。 ・尺八の説明 ・Ｍ３の説明､薄暮とは夕暮れになったばかりの時（もしくは時間）を言います。 ・なぜ尺八奏者の自分が作曲しているか、自分の気持ちを表現したいときに自分の言葉を使いたいから。 ・薄暮は自分の住む東京の多摩川を見て作りました。琵琶湖でもいいし、色々な風景を想像しながら聴いてください。	MC：川田→風間 ・MC中に川田、谷富により、十七絃と箏の位置を入れ替える。 ・「薄暮」のタイトルにフリップを用いる。
16：46	Ｍ３　薄暮 (2：10)	風間禅寿（尺八）	・尺八が前に出て演奏
18：56	・Ｍ３の説明 ・十七絃の紹介 (4：20)	・みんなはどんな風景が思い浮かびましたか。谷富さんは… ・私が思い浮かんだのは故郷天草の夕暮れの風景です。そして箏を始めたのは小学生の頃。学校行事で「さくら」を踊る機会があり、BGMの箏の音色に惹かれ、家にある箏を演奏してもらったのがきっかけです。 ・ちなみに十七絃とは十七本の絃を張ってある箏。低い、力強い音が出ます。 ・箏が私のお気に入りの楽器になるきっかけになった「さくら」を、今日は十七絃で弾いてみます。	MC：風間→谷富 ・「十七絃」の説明にフリップを用いる。
23：16	さくら (1：57)	谷富愛美（十七絃）	・舞台左より箏、十七絃
25：13	・十七絃について ・エルサルバドルを手拍子で体験 (4：38)	・低い力強い十七絃の音を感じてもらえましたか。自然の素材で作られているからこそ出る柔らかい音。 ・次は皆にも音楽に参加してもらいたいと思います。 ・一回立ち上がって体をリラックスさせる。 ・次の曲はアメリカとブラジルの間のエルサルバドルという国をイメージした曲。 ・風間に合わせて１回目：手拍子、２回目：手拍子＋足拍子、２回とも途中で箏の演奏が入り、自然と音楽体験になっていく。 ・次は尺八も入った演奏を聴いてもらいます。そのまま楽しみながら聴いてください。	MC：谷富→風間 ・風間MCの間に、川田、谷富が調弦。
29：51	Ｍ４　エルサルバドル (4：18)	川田健太（箏）・谷富愛美（十七絃）・風間禅寿（尺八）	・舞台左より箏、十七絃、尺八
34：09	・日本人が大切にしている四季 ・Ｍ５の導入 (4：09)	・日本の自然から､外国の音楽へ。音楽とは表現の幅が広くて面白いなと思って、いつも演奏しています。 ・ここで三択クイズ、日本にあって海外にないものはなんだ？ １．バナナ　２．湖　３.四季 ・正解は四季です。みんなはそれぞれの季節でどんなことを連想しますか。 ・昔から日本人はこの四季をとても大切にしていて、四季にも色々な名前がついています。その中から今日は「春雨クライシス」という曲を演奏します。 ・春雨クライシスとは、もうすぐ春になるときに降る雨、クライシスはドキドキワクワクな気持ちを表現しています。 ・みんなが想う春の景色を想像しながら聴いてみてください。	MC：川田→風間 ・MC中に川田、谷富が調絃。 ・「春雨クライシス」のタイトルにフリップを用いる。
38：18	Ｍ５　春雨クライシス（2章） (4：34)	川田健太（箏）・谷富愛美（十七絃）・風間禅寿（尺八）	・舞台左より箏、十七絃、尺八
42：52	・M5の説明 ・コンサート告知 ・退場 (1：11)	・春雨クライシスを聴いてどんな景色が浮かびましたか。 ・今日は和楽器の音で色々な自然の音を聴いてもらいました。ぜひみんなの身近にある風景を大切にしていってください。 ・３/９に木之本スティックホールでコンサートを行うので､ぜひ来てください。	MC：川田 ・ホールスタッフがポスターを出しながら告知。

実施団体：公益財団法人河内長野市文化振興財団
実施時期：令和６年２月８日（木）～令和６年２月10日（土）
出演アーティスト：藤重奈那子（箏･十七絃･三味線） 遠藤咲季子（箏･十七絃） 森梓紗（箏･十七絃･三味線）

アクティビティ

タイトル：「多彩に輝く音色」
期　　日：令和６年２月８日　２限目 9：45～10：30
会　　場：河内長野市立高向小学校　多目的室
参 加 者：20名（４年生）

プログラムの企画構成は藤重さんに一任する形でお願いしました。内容については今回、箏６面を使用し子ども達の想像を掻き立てるような演奏部分と楽器に触れることで新たな発見に導く体験部分とで充実したアクティビティとなったのではないかと思います。子ども達の１音１音に対するリアクションがとても楽しそうでした。

タイトル：「多彩に輝く音色」
期　　日：令和６年２月８日　５限目　13：55～14：40
会　　場：河内長野市立石仏小学校　多目的室
参 加 者：33名（４年生）

演奏内容は全校共通。子ども達が会場に入室する際に箏が６面ある状況にどよめきが沸いていました。演者さんが入場した時の程よい緊張感の中で演奏された「Venus」がより心地良い空間を生み出していました。「汽車ごっこ」では箏目線からの電車の様子が子ども達の反応をよくしており体験コーナーで子ども達が自ら進んで箏と十七弦の違いを聞き入っている様子に興味を持ってくれているのだと感じました。

タイトル：「多彩に輝く音色」
期　　日：令和６年２月９日　２限目　9：40～10：25
会　　場：河内長野市立川上小学校　ふれあいルーム
参 加 者：28名（４年生）

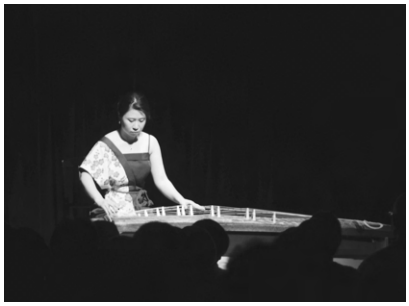
演奏内容は全校共通。今回、小学校３校共に４年生を対象にした理由は音楽の授業で「箏」を取り上げていた為、子ども達の印象も入りやすいのではと思い各学校にお願いをしました。こちらの学校では子ども達はもちろんの事、音楽を担当されている先生がより積極的に箏への興味を示してくださり、アクティビティ終了後にも演者さんへお話を伺っていたりとこの時間を次に繋げようとする姿が印象的でした。

タイトル：「多彩に輝く音色」
期　　日：令和６年２月９日　６限目　14：20～15：10
会　　場：河内長野市立美加の台中学校　視聴覚室
参 加 者：46名（１年生 ２クラス）

演奏内容は全校共通でしたが、こちらの学校では対象が中学生ということもあり「汽車ごっこ」に変わり「手事」を演奏してくださいました。プログラム中の「砂絵」は演奏を聞いた後に子ども達へ感想を聞いていくのですが、小学生の真っ直ぐな反応とは違い詳細に回答してくれた姿に同じ曲でも発見するポイントの違いにこちら側が感心致しました。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：令和５年度公共ホール邦楽活性化事業　「巡」－ＭＥＧＵＲＵ－　時代を超える和の音
期　　日：令和６年２月10日　開場13：30　開演14：00
会　　場：ラブリーホール・小ホール
参 加 者：127名



「和」の音楽に関心を持っていただきたくメインターゲットはアクティビティと同じ若い世代であるが、聞きなじみがあるシルバー世代の方々を含めて幅広い世代に向けたコンサートを企画する。

企画概要：今回登録アーティストの藤重奈那子さんが得意とされている「箏」と「地歌三絃」を中心とした曲の構成。特に「地歌三絃」は大阪で古くから伝わる「地歌（上方唄）」を演奏していただく事で改めてその曲の良さにふれていただく。

ホール担当者の意見・評価
事業グループ　苅谷 文隆

①　応募の動機・事業のねらい

当ホールでは洋モノのコンサートが多い事や地元の風土として和モノの文化が浸透していない現実を踏まえ、邦楽事業活性化の一つのきっかけになればと考え当事業に応募いたしました。タイトルに「活性化」とあるように、登録アーティストの想いや魅力を最大限に活かしつつ河内長野独自の企画案を盛り込み、河内長野に「和の文化」を発展させる土台作りを目指しました。

②　企画のポイント

アクティビティについては多くの「子ども達」に生の音を聴いてもらうだけでなく「音の違い」を聞き分けてもらいたく長唄三味線奏者に助演いただき、ホールコンサートについては河内長野独自の視点として「鬼伝説」と「楠木正成」を取り入れた「まさしげの鬼退治」なる創作物を取り込み、長唄・舞踊各方面の助演によりコンサート自体を盛り上げる狙いと藤重さんはじめとするお箏や三絃の魅力も織り交ぜながら「ここでしか見れない」もの「また見たい」と思わせるものを企画いたしました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

当財団が提案したアクティビティ及びホールコンサートの企画内容が双方とも修正を必要とする展開になった事。

④　上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティについてはコーディネーターの申し出通りに登録アーティストに一任する形でお願いする事にいたしました。ホールコンサートについてはこちら側の企画実現に向けてご尽力くださいましたが結果として調整が必要となり、アーティスト側の意向に添う形で進めました。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティ及びホールコンサート共にアーティスト側の意向に沿う形での上演となりました。アクティビティでは、実際に参加いただいた子ども達には教科書を見るだけでは経験する事の出来ない貴重な体験になったと感じましたし、ホールコンサートではお箏や地歌三絃の魅力をお届けできました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

今回、初めての取り組みであった為、全力で取り組みましたが、アクティビティとホールコンサートの一部において経験不足で未熟な点が露呈してしまう形となり、関係各所にご迷惑をおかけした事を申し訳なく思います。本事業の経験を活かし今後の事業運営に役立てていければと考えます。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

今回、ホール側・地域創造側・アーティスト側の各担当者がそれぞれ初めての組み合わせの中で三者間でそれぞれの考えや要望がある中､協議して一つの形を作り上げていく事の大変さを思い知りました。そこで各担当者のパーソナルな部分にもっとフォーカスした上で進める事の大事さと「活性化」とあるならばいかに次に繋げる事を念頭に置いて取り組まないといけないと思いました。この河内長野で｢和｣の裾野を広げる為、私自身の過去の経験と知識を活かしスモールパッケージからクオリティーの高いものを作り上げ文化普及に努めたいと思います。

コーディネーターレポート 「距離を縮める」
米澤　浩

今年度の河内長野市立文化会館『ラブリーホール』での『公共ホール邦楽活性化事業』を担当したのは、藤重奈那子（ふじしげ ななこ）さんがリーダーとなり、遠藤咲季子（えんどう さきこ）さん、森梓紗（もり あずさ）さん３名の箏（こと）奏者トリオだった。（以下、敬称略）

「ラブリーホール」は、既にアンサンブルから小編成オーケストラまで幅広いアウトリーチ（以下、OR）を手掛けていらっしゃりアクティビティの実績を豊富に持つホールだが、これまで邦楽は手掛けて来なかったために本事業に手を挙げて下さり、「ラブリーホール」事業グループからは歌舞伎役者としての経歴を持ち日本舞踊家でもある苅谷文隆さん、管理グループからは箏の演奏経験を持つ新藤彩音さんが本事業を担当して下さった。

７月にZoom、11月の下見

「現地下見」に先立つこと４ヵ月、７月の中旬に藤重リーダーとラブリーホールのご担当それぞれとのZoomミーティングを設け、藤重リーダーとはプログラム内容等の確認、ラブリーホールとのミーティングには事業グループのマネジャー相輪研二さんも加わり本事業のガイドラインの確認からスタートした。

コロナ禍の３年間は好ましくない影響が多岐にわたったが、その一方でZoomミーティングがコミュニケーションツールとして定着したことは好ましく、本事業でも「現地下見」に向けて複数回のZoomミーティングを持ち情報の共有を図った。ラブリーホールでは小学校３校と中学校１校を今回のOR先として選び、実施４校との間で丁寧な調整を進めて下さっていたお陰で、11月に行った「現地下見」はホール・実施校共に非常にスムーズに進んだ。

２月 事業の実施

【アクティビティ】

藤重チームは箏５面と十七絃１面の計６面を持ち込んでORを実施した。これは藤重が河内長野市に隣接する和泉市在住であることに加え、楽器の搬入を大阪の田波楽器（箏屋）に依頼することで実現できたが、これは藤重が「地の利」を活かしての事業実施だった。

対象人数が小学校では22 ～ 36名、中学校では46名であったため、藤重チームは児童生徒を取り囲む形で四方に箏を配置する設営でORを行った。四方を囲むということは四方が見えることになる。子ども達にとって少しでも「非日常的空間」にするためにラブリーホールに黒布を持ち込んで頂くようお願いし、動かせない教室の備品などを黒布で覆い隠す等、各現場で柔軟に対応して頂けたことが助けとなった。

演奏から導入したORプログラムは、大阪・徳島・東京出身という３人がそれぞれのキャラクターを活かして演奏者側から積極的に子ども達に近付いて行く構成。箏の表現力を伝えることはもちろん、四方に配置した箏の演奏で「箏の響きで子ども達を包み込む」ことも意図したが、これには端や後ろに座っている児童生徒も「目の前での演奏に触れる」という効果もあった。

又、プログラムの中で子ども達を３グループに分け、グループ毎に周りに配置された箏の場所を順番に巡り回って「箏の響きを実際に体で体験」するコーナーも設けたが、これは子ども達を飽きさせないアイデアとして有効なアイデアであるし、子ども達に「実体験」を持ってもらうことでORの実施効果も期待できる。

ただ、時間を含めた流れをいかに冷静にコントロールするか？という課題が出て来る。この課題をク

リアする方法は､実施した内容と結果をフィードバックした｢ファシリテーターとしてのブラッシュアップ」をその都度行うしか無いと思うし、不可欠だとも思う。

【アクティビティ後】

１日目と２日目のORからホールに戻った後は、ホール公演の構成内容を勘案して各曲の音出しをしながら「演奏の位置決め」を行い、当日のゲネプロに向けての準備を丁寧に整えて行くことに軸を置いたが、ここでアシスタントとして「コーディネーターチーム」に加わっていた名取萌音さんが本領を発揮した。

名取は、邦楽関連はもちろん地域創造の事業自体が初めてであったが、演劇の制作を手掛けているため邦楽の〈バミリ〉方法を直ぐに把握し、三味線の椅子の角度にまで丁寧に配慮した〈バミリ〉入れの全てをカバーしてくれた。

アーティストから提出された楽器配置図に〈バミリ〉や〈マイク〉等の必要情報を追加し、舞台技術さん・転換スタッフさんと共有する舞台情報が完璧にできあがった。

【ホール公演】

藤重チームはホール公演でもお客様方に近付くため、ラブリーホールの小ホール（多目的）のステージではなくステージ前の「前迫」を使い、ロールバックチェアを使用せずにホール客席エリア後方に楽器に触れてもらえるスペースを設営することを企画した。

又プログラムの構成にも力を入れ、１曲目とトリの作品は同じ三重奏の編成であったが、それ以外の5曲は全て楽器編成が異なるソロとデュオで構成した。藤重と森は「三味線･箏･十七絃」、遠藤は「箏･十七絃」を演奏するという八面六臂状態で、三味線・箏の音色だけでなくアンサンブル（楽器）の組み合わせでの「様々な響き」を余すところなく伝えたいという意欲に溢れていた。

そして心強かったのは、奏者がイメージした舞台を実現するためにラブリーホールの照明・音響・舞台の技術さん達が全面的にサポートして下さったことだ。又、田波楽器がホール公演の舞台転換スタッフとして入ったからこそ実現できた企画内容で、「地の利」に支えられて実現できた企画だと言える。

さて、定刻に開場し河内長野のお客さま方が座席を埋めて行く中、和歌山県立橋本高等学校の箏曲部の生徒さん達が先生に引率されて17名来場して空いていた客席後部の座席を埋め、開演15分前には椅子を追加し始めなければならない状況となった。若い年代のお客様が大挙して来場して下さるのが嬉しいことはもちろんだが、開場して程なく椅子を追加する状況にお客様方がコンサートを楽しみに来場して下さっていることを感じ、本当に嬉しかった。

ホール公演でも３人がそれぞれのキャラクターを活かしてお客様に近付いて行く進行は、お客様方に楽しんで頂けたことだろう。

終演後の楽器に触れてもらうコーナーも好評だったようだ。開場時のお客様の来場が早いことや終演後になかなかお客様方の波が引かない様子は、ホール公演が良いコンサートになったこと、事業が成功したことの証だと思う。

事業を終えて思うこと

「アーティストチーム」･「公共ホールチーム」･「コーディネーターチーム」と、３つのチームが集結

して事業に臨むのは本事業の常である。それぞれのチームが距離を縮めて『連携』し、『藤重ラブリー邦活チーム』となって同じゴールを目指すことが、河内長野での事業を「成功に導く鍵」になるとの考えはこれまでと変わらない。距離を縮めて『連携』する一歩目が、『情報共有』であり『互いを知る』ことだとも思う。

今回もこれらを心掛けたが、『藤重ラブリー邦活チーム』の全員にとって今回の事業実施が、先への広がりに繋がって行けばこれに勝る喜びは無い。

ラブリーホールにとって今回の「公共ホール邦楽活性化事業」が、今後も邦楽を取り上げて行く「きっかけ」になってくれることを心から願い、コーディネーターレポートを終えたい。

アウトリーチ進行シート（大阪府　河内長野市）
名取　萌音（アシスタント）

実施日	令和６年２月９日
実施先	河内長野市川上小学校
対象・実施先の情報	28名（４年生）　於：ふれあいルーム　２限（9：40～10：25）
出演者	藤重奈那子（箏）、遠藤咲季子（十七弦）、森梓紗（箏）
ねらい／目標	タイトル「多彩に輝く音色」 音楽の授業で和楽器を勉強する４年生を対象に、見る・聴く・触れる内容で実施。若い世代に中々浸透していない「和」の音楽を身近に感じ、興味を持つ土台作りのきっかけとする。

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	入場（1分）	担任の先生による紹介、拍手での呼び込み	演奏者入場
1：00	楽曲演奏（3分）	Ｍ１「Venus」 藤重（箏）、森（箏）、遠藤（十七弦）	児童の前に3人が並ぶ形で演奏
4：00	MC①（4分）	◆自己紹介 藤重：おはようございます！私たちは今日、この目の前にある日本の楽器、箏の音を届けに来ました。 私はみんなと同じ大阪出身の藤重奈那子です。河内長野市のお隣、和泉市というところからきました。みんなと同じくらいの年齢の時に、お琴を頑張ろう！と決めてプロの演奏家になりました。 森：東京都出身の森梓紗です。私はお母さんがお琴を習っていた影響で、小学校から練習を始めました。 遠藤：私は徳島県出身の遠藤咲季子です。東京と徳島どちらでもお仕事をしていてよく奈那子ちゃんのおうちに遊びにいくので、大阪はとても身近に感じています。今日はこの十七弦という大きな楽器を担当します。 藤重：私たちは東京藝術大学で出会って、今こうして演奏家として一緒に活動しています。今日は色々な音色を感じてもらえたら嬉しいです。 ◆「Venus」の楽曲紹介 藤重：最初に演奏した「Venus」という曲は、実は梓紗ちゃんが作曲してくれました。梓紗ちゃん、この曲はどんなイメージで作ったの？ 森：はい、聴いてくれてありがとうございました！ 「ビーナス」って聞いたことあるかな？英語で女神のことです。でもこの曲は女神様をイメージしたわけじゃありません。今みたいな冬の早朝に見える、ピンクや水色の淡い色の混ざった空のことを「ビーナスベルト」と言うんだって。そんな冬の澄んだ空気と綺麗な空の色をイメージしながら作りました。もし明日早起きできたら、是非カーテンを開けて空を眺めてみてください。 ◆楽器の説明と次の曲への調弦 藤重：では、次の曲に行きたいと思います。次は汽車ごっこを演奏します。その前に、皆さんはお琴の弦が何本あるか知っていますか？ （児童何人かが手を挙げる） そう、13本です。ピアノに比べて少ないので、この箏柱（ことじ）というものを動かして色々な曲が演奏できるようにしています。ちょっとやってみますね。（琴柱を高い音→低い音へと順番に１つずつ動かす。児童からは「おぉー！」という反応） これで完成。それでは聞いて下さい！	
8：00	楽曲演奏（3分）	Ｍ２「汽車ごっこ」 藤重（箏）	藤重：箏 森：フリップを動かし、汽車が動き出して煙が上がる様子を視覚的に補足
11：00	MC②（3分）	◆楽曲紹介と聴き方の導入 藤重：ありがとうございました！じゃあ、次はあっち。 遠藤：はい、みんな椅子をくるっとしてこちらを向いてください。 （椅子を反転して後ろ向きに座り直す） 次は見ての通り、少し変わったことをしたいと思います。３人でみんなを取り囲んで演奏するので、みんなは好きな方向を見たり、目をつぶって聴いたりしても大丈夫。次は沢井忠夫作曲の「砂絵」を演奏します。 砂絵って知ってるかな？ 砂を使った絵なんだけど、みんなには色んなことを想像しながら聴いてほしいです。どんな場所の砂なのか。それとも砂じゃなく聞こえるのか…みんなの感じたことを後で聞きたいと思います。 （児童からは「えー！」という好意的な驚きの反応）	
14：00	楽曲演奏（5分）	Ｍ３「砂絵」 藤重（箏）、森（箏）、遠藤（十七弦）	後ろの正面に十七弦、と児童を挟む左右に箏を配置し、音で囲む形で演奏
19：00	MC3（13分）	◆感想の共有 遠藤：みんなどんな風に感じた？ （挙手した児童を指名。「色んな色の絵」「海」など様々な感想が出てくる。演奏家は「それも素敵だね！」と反応） 遠藤：私は砂が手からこぼれおちる瞬間をイメージしながら演奏しました。２人はどうだった？ （遠藤→藤重→森の順に自身の想像したものについて話す） ◆楽器に触れる体験 遠藤：じゃあここで、みんなにここまで聴いてもらったお箏に触ってみてもらおうと思います。椅子を戻してください。（椅子を反転してもとの形に戻す） 藤重：まずみんなを３つの班に分けます。１班は私のところで、まずこんな感じで箏の裏を触って響きを感じてもらいます。２班は咲季子ちゃんのところの大きな十七絃の裏を触ってもらいます。３班は梓紗ちゃんの箏の裏にある２つの穴の部分に耳をよせてみてください。一箇所で全員が体験できたら、時計回りに次の場所へ移動しましょう。じゃあ移動スタート！ ◆楽曲紹介 森：では、次は元の位置に戻って、みんなが知っていると思う曲を演奏したいと思います。何を弾くかはお楽しみ！	「砂絵」で使用していた左右の箏と正面の十七弦を使用。児童と近い距離で響きの特徴や違いについて話す

32：00：00	楽曲演奏（3分）	Ｍ４「新時代」 藤重（箏）、森（箏）、遠藤（十七弦）	児童の前に３人が並ぶ形で演奏
35：00：00	MC④（3分）	◆楽曲紹介と聴き方の導入 森：みんな知ってる曲だったよね。（児童数名から「新時代！」の声） 最後は、私のお友達の冷水乃栄流くんが５年前に作った「脆性ノスタルジア」を演奏します。みんな、夏といえばどんな思い出があるかな？ （児童から「花火」「蝉」「海」「スイカ」など様々な声） 森：たくさん出てきたね！あとは、道路がゆらゆらーっとして見えたり、夏を思い出すとなんだか懐かしいような気持ちになるよね。みんなも去年の夏や色んな夏の出来事を思い出しながら聴いてみてください。藤重：この曲は私達も大好きで色んな場所で演奏しています。最後の方ではびっくりするものが登場するからよく見ててね。それでは最後の曲「脆性ノスタルジア」、心を込めて演奏します。	
38：00：00	楽曲演奏（7分）	Ｍ５「脆性ノスタルジア」 藤重（箏）、森（箏）、遠藤（十七弦）	児童の前に３人が並ぶ形で演奏
45：00：00	挨拶・退出	藤重：今日はありがとうございました。私たちはラブリーホールで今週の土曜日にコンサートをします。よかったら是非遊びに来てください！ （児童全員による挨拶、担任の先生による挨拶、拍手での送り出し）	演奏者退場

実施団体：公益財団法人神戸市民文化振興財団　中央区文化センター
実施時期：令和５年10月19日（木）～令和５年10月21日（土）
出演アーティスト：藤重奈那子（箏･十七絃･三味線）　遠藤咲季子（箏･十七絃）　森梓紗（箏･三味線）

アクティビティ

タイトル：多彩に輝く音色
期　　日：令和５年10月19日（木）　10：35 ～ 11：20
会　　場：ひよどり台小学校　多目的室
参 加 者：６年生（６年１組）　36名

「多彩に輝く音色」をテーマに、生の音と普段聴く箏の音との違い、鮮やかな箏の音の響き、箏と十七絃の音色の違いを感じながら、児童は感動していました。宮城道雄作曲「汽車ごっこ」では演奏に合わせて、汽車があたかも走っているかのように（演奏家が描かれた）周りの風景と汽車と煙の絵を動かしていくのを興味深く見入っていました。沢井忠夫作曲「砂絵」では児童の周りを囲んで演奏し、後ろからも横からも聴こえてくる立体的な音の響きを楽しんでいました。児童は曲や箏、演奏家について質問したり、演奏家から砂絵の曲のイメージについて聞かれると各々違う感じ方を表現したりと演奏家と活発な交流がされていました。楽器（箏、十七絃）に触れるコーナーがあり、弾いている音の振動、箏の裏面に耳をかざし音の響きを感じ歓声をあげていました。冷水乃栄流作曲の「脆性ノスタルジア」では途中絃が切れたような音に驚いたりと曲の世界に入り込んでいました。

タイトル：多彩に輝く音色
期　　日：令和５年10月19日（木）　11：30 ～ 12：15
会　　場：ひよどり台小学校　多目的室
参 加 者：６年生（６年２組）　35名

「多彩に輝く音色」をテーマに、生の音と普段聴く箏の音との違い、鮮やかな箏の音の響き、箏と十七絃の音色の違いを感じながら、児童は感動していました。宮城道雄作曲「汽車ごっこ」では演奏に合わせて、汽車があたかも走っているかのように（演奏家が描かれた）周りの風景と汽車と煙の絵を動かしていくのを興味深く見入っていました。沢井忠夫作曲「砂絵」では児童の周りを囲んで演奏し、後ろからも横からも聴こえてくる立体的な音の響きを楽しんでいました。楽器（箏、十七絃）に触れるコーナーでは、弾いている音の振動、箏、十七絃の裏面に耳をかざし音の違いを感じていました。冷水乃栄流作曲の「脆性ノスタルジア」では途中絃が切れたような音など特殊奏法による新鮮な音に驚き、聴き入っていました。

タイトル：多彩に輝く音色
期　　日：令和５年10月19日（木）　14：40 ～ 15：25
会　　場：ひよどり台小学校　多目的室
参 加 者：のびのび広場参加者（小学校１・２年生）　43名

低学年で通常は活発でガヤガヤしているとのことでしたが、宮城道雄作曲「汽車ごっこ」では演奏に合わせて、汽車があたかも走っているかのように（演奏家が描かれた）周りの風景と汽車と煙の絵を動かしていくのを見入っていました。沢井忠夫作曲「砂絵」では児童の周りを囲んで演奏し、後ろからも横からも聴こえてくる立体的な音の響きに身体を揺らした児童もいました。楽器（箏､十七絃）に触れるコーナーがあり、弾いている音の振動、箏の裏面に耳をかざし音の響きを感じ大きな歓声をあげていました。冷水乃栄流作曲の「脆性ノスタルジア」では途中絃が切れたような音にハッとしたりと特殊奏法による新鮮な音に集中して聴き入っていました。演奏家への質問も手を元気よく挙げる子供が多く生き生きとしていました。

タイトル：多彩に輝く音色
期　　日：令和５年10月20日（金）　10：40 ～ 11：40
会　　場：神戸親和大学　音楽室
参 加 者：大学生　30名、教員　11名

教員や保育士を目指す大学生の方に、子供向けのプログラムを体験していただきました。「多彩に輝く音色」をテーマに、生の音と普段聴く箏の音との違い、鮮やかな箏の音の響き、箏と十七絃の音色の違いを感じながら､学生は感動していました。宮城道雄作曲｢汽車ごっこ」では演奏に合わせて、汽車があたかも走っているかのように（演奏家が描かれた）周りの風景と汽車と煙の絵を動かしていくのを興味深く見入っていました。沢井忠夫作曲「砂絵」では学生の周りを囲んで演奏し、後ろからも横からも聴こえてくる立体的な音の響きを楽しんでいました。楽器（箏、十七絃）に触れるコーナーがあり、弾いている音の振動、箏の裏面に耳をかざし音の響きを実感していました。絃のこすれる音、絃が切れたような音、箏を叩く音など特殊奏法による音に驚き、新鮮味を感じていました。最後に学生からの質疑応答コーナーでは、箏の奏法について熱心に質問したり、初めて箏に実際に触れて感動を言葉にしていました。

タイトル：多彩に輝く音色
期　　日：令和５年10月20日（金）　16：00 ～ 16：45
会　　場：こども本の森
参 加 者：小学校低学年、親　18名

小学生以上の子どもとその保護者２名１組（定員25組50名）で、事前予約制でこども本の森にて応募したものの、当日あいにくの雨で当初応募された方も来られない方がいたりと参加者が少なかったが、飛び入りで外国人の方が参加されたりした。安藤忠男建築の建物の形状を活かし、デッキ、階段踊り場の最上段、中段を利用した演奏は、立体的な音が流れ参加者も聴き入っていました。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：彩-sai-
期　　日：令和５年10月21日（土）　14：00 ～ 15：30
会　　場：中央区文化センター　多目的ルーム
参 加 者：72名

「多彩に輝く音色」をテーマに、生の音と普段聴く箏の音との違い、箏合奏による鮮やかな箏の音の響き、箏と十七絃の音色の違いを感じながら、お客様は最初から最後まで聴き入っていました。沢井忠夫作曲「砂絵」では観客席の周りを囲んで演奏し、後ろからも横からも聴こえてくる立体的な音の響きを楽しんでいました。春、夏、秋、冬の情景や感情を見事に表現された沢井忠夫作曲の「百花譜」、古典曲を現代的にアレンジした深海さとみ作曲の「秋風幻想」、途中絃が切れたような音など特殊奏法による新鮮な音が表現された冷水乃栄流作曲の「脆性ノスタルジア」とどれもが従来にはないお箏の世界観が表現されていました。

ホール担当者の意見・評価
中央区文化センター　飛屋　健司

①　応募の動機・事業のねらい

神戸市中央区では邦楽については、神戸文化ホールで神戸三曲演奏会が開催され、また他団体でワークショップが行われ、中央区文化センターでも講師主催講座が開催されています。しかしまだまだ若い世代に浸透していないように思います。次世代を担う神戸市民の若い世代が邦楽イベントに参加体験することにより、日本古来の音楽である邦楽や現代邦楽あるいはアレンジ曲の生演奏、演奏家との交流を通じて邦楽の素晴らしさを感じていただく。邦楽が興味の対象に加わることにより、今後自発的なイベントへの参加を通じて神戸市の文化芸術の普及啓発、推進につながると考えました。また、当館は昨年開館して１年経ち、スタッフの事業経験も浅く、事業実行時の不足している点を見直すいい機会だと思い応募いたしました。

②　企画のポイント

アクティビティでは子供たちに箏の生演奏と演奏家との交流を通じて、日本古来の音楽、邦楽のすばらしさを感じていただき、興味を持っていただくことを目的としました。そのため箏、演奏曲についてわかりやすく演奏家から説明をしていただくと同時に演奏曲の感想を子供たちから聴くなど双方向で交流をする。子供たちが箏、十七絃に触れて音の響きを感じる。演奏家が演奏曲に合わせて自身作成のフリップを入れることにより、情景がイメージできる。箏合奏による鮮やかな音の響き、特殊奏法による新鮮な音の世界、３方向から奏でる立体的な音、楽器の持つ多様な音色を楽しんでもらう。

ホールプログラムでは、舞台上だけでなくお客様の周りでも演奏し、曲ごとに照明を変え、変化をつける。また、邦楽のコンサートに初めての方でもわかりやすいパンフレットを意識し曲紹介を盛り込んだ。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

目標としていたアクティビティ先の小学校あるいは中学校で希望されるところがなく、２ヶ月前まで決まっていなかった。

邦楽の舞台転換がスタッフ全員初めてのこともあり、スムーズにできるか心配だった。また照明設備も大ホールでないため、本格的な設備は無く、曲ごとに照明の角度、明暗変更に苦慮した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

神戸市こども家庭局の放課後子供教室推進事業の「神戸っ子のびのび広場事業」の研修会でプレゼンを実施しました。そのうちの１つのひよどり台小学校のびのび広場世話人からアクティビティの了解を取り、その下見先の教頭を通じて小学校のアクティビティの了解も取ることができました。最初、目標を小学校の生徒としていましたが、将来教員を目指す大学の生徒も対象に加えました。それは日本の伝統音楽のよさや美しさを味わう機会となり、今回の体験が将来の教育に生かされることを期待したからです。最終的にアクティビティ５コマとなったが、１コマは当館単独の事業とすることにより４コマの条件を満たした形となった。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティを実施した小学校、大学から学校での演奏がよかったので最終の公演に参加したとの声もいただき、この時期学園祭や音楽会等の行事で忙しいにも関わらず来ていただいたことに感謝しました。来場者からは現代的、古典的交えての新しい世界を見させていただいた、新鮮で感動したとの賞

賛の声が多かった。アクティビティでは演奏家が曲目にあった風景、汽車の絵を自作し曲に合わせて動かすことによりあたかも汽車が走っているかのようにした事、子供達に箏、十七絃を触らせて音の響きを体感してもらう事、あるいは3方向に楽器を設置し立体的な音を聴かせた事、わかりやすく説明をして頂いた事等工夫されていて低学年の子供も鑑賞中飽きずに最後まで興味深く聴いていました。目的としていた邦楽のすばらしさを感じていただき、興味を持っていただいたと思います。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

対象を若い世代特に小学生としたが、10月のアクティビティ実施が小学校の音楽祭、文化祭他の学校行事が重なり、２カ月前までアウトリーチ先を決めるまで小中学校の校長会、放課後こども教室推進事業、箏の部活動をされている学校に説明、アプローチをしたがほとんど手を挙げられる所は無かった状況でした。小学校の年間通してのスケジュールに途中から新たなプログラムを割り込みするのはハードルが高いと感じ、毎年継続して実施する仕組み作りが必要だと思いました。

今回、チラシ作成でも邦楽に対する認識が浅かったこともあり、コーデイネーター他皆様からのアドバイスを受けてチラシが２カ月前に完成しました。今後は要領を得てスムーズにチラシ作成をしPR活動が早めに出来るようにしたいと思います。公演に向けての集客アプローチとしてのチラシであり、小学校校長会への配布、図書館配架、別なコンサートへ折込チラシ、SNS、財団関係先への配布、他館の邦楽講座への配布、市の広報等告知する先を幅広くとりましたが、必ずしも効果があったとはいえず、今後当館のイベントアンケートにて細かく分析することが必要です。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

当館は貸館事業としての割合が多く、自主イベント自体の開催が年間少なくその為スタッフのイベントへの経験値が少ない状況で、今回の経験を通して重要な心構え、タスク、邦楽特有の舞台転換について多くのことを学ぶことができました。当館スタッフもアクティビティから公演までやり遂げることができるか心配でした。途中心折れた時期もありましたが、キックオフとなったZOOMミーテイングから最後の公演までコーディネーター、サブコーディネーター、演奏家、地域創造の方々からの暖かい声援、細かいアドバイスにより事業が無事終了したことに感謝しています。また演奏家の本番でのプロならではの工夫をされたパーフォマンスにより子供から大人まで箏、十七絃、三味線の生の音、多様な音色に惹かれた事で、当初目的である邦楽に興味を持っていただくことは達成したと思います。公演アンケートでは箏のイメージが古いイメージから現代風の「彩り」豊かなイメージに変わり音楽の幅の広さを感じたとの声も多くあり、このようなイベントを通じて、今後も日本古来の音楽である邦楽を館として地域の方々に伝えることができればと思っています。

コーディネーターレポート
伊藤　由貴子

今回は、政令指定都市・神戸市の中央区という、繁華街に囲まれた、いわゆる都市部での開催。しかも、主催となる施設が新しく、邦楽事業の制作は初めて、ということで、制作段階では山坂ありましたが、最終的には地域の個性を発揮した楽しい事業となりました。

チーム神戸の関係者全員に、改めて、お疲れさま！と感謝を申し上げます。

１．粘りに粘って、多彩になったアクティビティ先

今回の舞台、中央区文化センター（以下、センター）は１年前に開館したばかり。館長はじめ職員の方々もこうした事業に携わるのは初めてで、地域とのネットワークはこれから、という状況でした。

センター側が本事業を通してめざしたのは、「次代を担う神戸市民の若い世代に、箏の生演奏の持つ魅力に触れ、音を感じてもらいたい」ということ。対象は大学生までの若い層だが、最も届けたいのは小学生で、「プロの演奏家の素晴らしさを《直接会って》《目の前で》感じてもらいたい」をキーワードに掲げ、事業が始動しました。

しかし、いざスタートしてみたら、アクティビティ先として想定していた小学校がなかなか決まらない事態に直面。中央区に隣接する周辺地区にも対象を広げ、さらに交渉するも決まらず。行き詰まり感が漂いだした頃、私やサブコーディネーター、地域創造スタッフも加わって、代案を出し合い、事態の打開を試みる、という場面もありました。放課後の学童保育のような場所は？学校以外に子どもたちや親子を対象とした施設はない？小学生に直接アプローチが無理なら、これから小学校の先生になる学生たちにまず体験してもらったらどうか…。それらを受けて、センターの方々は粘り強く、関係各所への連絡と交渉を続け、そのお陰で、結果として以下の場所が固まったのでした。

まずは当初めざした通りの小学校「ひよどり台小学校（６年生児童対象）」。そして同小学校内で放課後の子どもたちの居場所として運営されている「のびのび広場（低学年児童対象）」。更に、地元大学の「神戸親和大学（小学校教員をめざす大学生対象）」、センター近隣の子どもに特化した図書館「こども本の森（子どもとその保護者対象）」。苦労の末、地域独自のユニークな「場」が揃いました。今回あちこちと交渉されたことが、今後のセンターにとって、地域の可能性発見とネットワークづくりの入り口になったことでしょう。

２．箏の多様な音色を届けるプログラム

一方、藤重奈那子さんをリーダーとするアーティスト達は、「箏の多様な音色を届けたい」という思いで、プログラムづくりに取り組みました。箏の音色の美しさだけでなく、華やかさ、楽しさ、激しさ、そして新しい奏法を駆使した新鮮な表現まで聴いていただこうと、宮城道雄、沢井忠夫、深海さとみ、三宅一徳、冷水乃英流ら、現代作品が並びました。それをアクティビティおよびホールコンサートの、空間や対象、それぞれの趣旨に合わせて構成し、演奏していきました。箏を使ってこんな音楽表現もできるんです！と、現代を生きるアーティストらしいプログラムができたと思います。

アクティビティの各現場では、対象者を取り囲むような楽器配置や、楽器に近づき、触って振動を感じる体験、子どもたちに向けては紙芝居風の演出を織り込み、衣装も和服生地のドレスで装うなど、日常と違う邦楽との出会いを生み出しました。こうして、主催者であるセンターがめざす《直接会って》《目の前で》を実現させたのでした。

３．プログラム成功に向けた工夫

制作・広報を担当したセンター側では、このアーティストたちのプログラムがより効果的に実施出来

るよう、細やかな工夫を重ねました。

例えば、来訪をワクワクしながら待つのも音楽体験の一環、ということで、簡易なチラシを作成し、それぞれのアクティビティ先で事前配布してもらいました。そこにはアーティストたちの写真や演奏曲目とともに、「いつから音楽を始めたのか」「なぜ箏が好きなのか」の質問への回答コメントも入れ、アーティスト一人一人にも親しみを持ってもらうような工夫がなされました。

事業で配布する印刷物やウェブでの情報提供においては、初めての人々に伝わるように、ということに意識的に取り組みました。「初めて読む人や子どもたちにこの漢字は読めるだろうか？」とルビをふり、「意味がわかるだろうか？」と文章を噛み砕き、「タイトルや写真、デザイン、キャッチコピーを見て、ワクワクした気持ちになれそうか？」を問いながら手直しを重ねました。あくまで子ども目線、初心者目線で作る努力が、邦楽と出会ってもらうための入り口を作ると思います。

こうした工夫の成果と、地域活動団体への細やかな呼びかけ、アーティストから動画をもらって区役所入り口で広報するなどの努力により、やや苦戦していたホールコンサートの集客も、当日は想定を大きく上回る結果となりました。

４．今後に向けて

センターは今後何年にもわたって、さまざまな事業を実施していくことと思います。邦楽事業も１回きりでなく、今後も継続していただきたいと願っています。

では、どうやったら持続可能になるか。

まずは、今回ご一緒できた、或いはご協力いただいた、学校や機関の「手を離さない」こと。そして、「神戸市中央区文化センターのネットワーク」を形成していくことが大事だと思います。特に子どもは、その保護者やそれを取り巻く社会へとつながる「種」とも言える存在ですから、学校はもとより、放課後の居場所や子ども図書館など、地域での子どもの活動の場と公共ホールがつながっていることは、今後の地域での活動の引き出しを増やし、体験や鑑賞を豊かに広げていくことでしょう。

それから、今回の事業を、センターを運営する神戸市民文化振興財団の理事長や、施設を所管する行政関係者らが視察に見えていたことに注目したいと思います。視察した方々は、実際に楽器の近くで演奏を聴く体験もされていました。こうしたことで、事業の必要性を、実感を持って理解してもらい、予算を得ていくことに結びつけていきたいものです。

邦楽事業は（残念ながら）多分クラシック音楽よりも市民が接するチャンスが少ないのです。ですが、だからこそ、逆に新たな出会いへの需要があり、そして、よりユニークな企画を創れる自由さを孕んでいるのだと思います。

今回忘れられないのは、「こども本の森」で、箏の真正面に座った女の子が、演奏中立膝のまま瞬ぎもせず、アーティストの手元を見つめていた、まさに「全集中」の姿。その子の心に、どれほど濃密に、箏の音が染み込んだことでしょう。また、何より嬉しかったことは、小学校でのアクティビティに参加した子どもたちの何人かが、保護者にねだって、最終日のコンサートに来てくれたこと。これは子どもたちの心を、チーム神戸が掴んだということです。センターの皆さん、このエビデンス、使えますよ！

アウトリーチ進行シート（兵庫県　神戸市）
吉田　佐和子（サブコーディネーター）

実施日	令和５年10月19日
実施先	ひよどり台小学校
対象・実施先の情報	ひよどり台小学校６年２組35名を対象に実施。校舎１階に位置する広めの多目的室で実施。
出演者（編成）	藤重奈那子、森梓紗、遠藤咲季子
ねらい／目標	和楽器の音色に触れる機会を持つことで、日本固有の楽器の音色や響きに興味を持ち、和楽器への興味やコンサート来場のきっかけをつくる

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
11：29	挨拶、入場 1'00	神戸市中央区文化センター飛屋館長	舞台下手
11：30	Ｍ１：祝宴 3'40		舞台正面 ３面（藤重、森、遠藤）
11：34	自己紹介 1'30	出身地、箏を始めたきっかけについて１人ずつ紹介	舞台正面
11：35	楽器紹介 2'00	子どもたちと一緒に弦の数を数え、琴柱を動かすとどのように音が変化するのか聴かせたり、箏は曲ごとに調弦しなければいけないことを紹介。その後、次の曲紹介をしながら調弦。その後次の曲を紹介。藤重さん、遠藤さんが曲を聴きながら想像して欲しい「楽しい行き先」をA4画用紙に描いたものを見せた。（藤重）	舞台正面
11：37	Ｍ２：汽車ごっこ 3'00	森さんが藤重さんの横の箏の前に座り、曲が始まる際には「出発しまーす！」と宣言したり、汽車が走っている情景を表す場面では、色画用紙を用いて作った汽車からけむりを出している様子を表していた。	舞台正面１面（藤重）
11：40	MC 2'00	好きな方向に、椅子の向きを変えて自由に聴くように指示（遠藤）	
11：42	Ｍ３：砂絵 5'00		正面舞台は使わず、児童を囲むように、客席の左側、右側、裏側に配置した箏で演奏。客席裏側は立奏台を使用。
11：47	MC 3'00	砂絵というタイトルから、どんな様子が思い浮かんだのかを児童に質問。積極的に手を挙げる児童が多くいた（森）	舞台正面
11：50	MC 1'30	アクティビティの説明（藤重）	
11：52	アクティビティ 6'00	楽器の響きを体験・体感するアクティビティ 体験場所が３箇所あること、児童の背後に設置している箏があったことから、ホール職員がスタッフとして児童の回遊を補助した	児童を３グループに分け、児童左側（藤重）・右側（森）・舞台正面（遠藤）の３箇所を使い、箏の下の部分に手をあてて楽器の響きを感じたり、箏の裏側にある穴からどんな風に音が聴こえるのかを聴いた。
11：58	MC 1'00	ノリノリで聴いてほしいと児童たちに伝えられ、手拍子がしやすいように配布していたプログラムなどのチラシを置くように促した。（森）	
11：59	Ｍ４：夜に駆ける 4'00		舞台正面
12：03	MC 2'00	森さんの同級生が作曲した曲であることや、夏をテーマにしていることを話し、児童たちにこの夏の思い出を思い出しながら聴いてみるよう促していた。（森）	
12：05	Ｍ５：脆性ノスタルジア 7'00		舞台正面

実施団体：三田市総合文化センター指定管理者 株式会社JTBコミュニケーションデザイン
実施時期：令和５年12月１日（金）～令和５年12月３日（日）
出演アーティスト：棚原健太(歌三線)　町田倫士（琉球箏）　大城建大郎（琉球笛）

アクティビティ

タイトル：小学校訪問コンサート
期　　日：令和５年12月１日　９：35 ～ 10：20
会　　場：三田市立本庄小学校　音楽室
参 加 者：51名（全校生・教諭）

三田市内全小学校4年生を対象に毎年開催しているアウトリーチの一環として今回琉楽で募集しお申込みのあった本庄小学校で開催した。小規模校ということもあり全校児童に聴いていただくことができた。

沖縄音階でかえるの歌を演奏した時の反応がとても良く、先生からは児童も一緒に歌いたかったと感想をいただいた。また、児童と一緒に歌詞を創り上げた口説は豊かな発想で興味深いものとなり、完成した口説を楽しそうに聴いているのが印象的だった。

タイトル：福祉施設訪問コンサート
期　　日：令和５年12月１日　　13：00 ～ 13：45
会　　場：さんだ子ども発達支援センター かるがも園　遊戯室
参 加 者：50名（園児・職員・保護者）

障害のある0歳から6歳までの子どもを対象に開催した。保護者も可能な方は一緒に聴いていただいた。子どもたちは演奏が始まると動きを止めて演奏をしっかりと聴いているなど反応がダイレクトに返ってくるのに驚いた。演奏者も子どもの反応を見てお話を極力短く演奏時間を長くしてくださって良かった。演奏者が考案した振付の動画を事前に見ていただいていたので一緒に踊って楽しいコンサートとなった。

タイトル：福祉施設訪問コンサート
期　　日：令和５年12月２日　10：15 ～ 11：00
会　　場：特別養護老人ホーム さんすい園　ふれあいホール
参 加 者：50名（特養・デイサービス・グループホーム・ケアハウス利用者・職員）

比較的軽度の入所者の方に聴いていただいた。沖縄出身の方がおられ、リハーサル時から見学して演奏者とお話しし、終了後もお見送りされるなど沖縄を懐かしんでいただいた。演奏中は知っている曲を一緒に口ずさんだり踊り出す方もおり、心から楽しんでいらっしゃるのが印象的だった。コロナ禍でイベント開催を中断していたそうで、久しぶりの公演を心待ちにされていたとのことで伺えて良かった。

タイトル：福祉施設訪問コンサート
期　　日：令和５年12月２日　13：30 ～ 14：15
会　　場：就労継続支援Ｂ型事業所 スクラム　作業室
参 加 者：31名（知的障害通所者・職員）

到着時、既に通所者の方が客席に座って待っており、リハーサルなしで開始時間まで控室で待機するというハプニングがあった。施設の方も皆このコンサートを楽しみにして待っていますので気にしないでくださいとのことだった。

演奏が始まると大変盛り上がり、終了後も盛大なアンコールをいただき、三線に合わせてカチャーシーが始まり、皆、立ち上がり演奏者も一緒に踊った。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：琉楽～南の島の響（ひびき）～
期　　日：令和５年12月３日　14：00 ～ 15：30
会　　場：郷の音ホール 小ホール
参 加 者：162名

前半は古典琉球音楽、後半では民謡・ポップスを演奏後、『三田と琉球の水彩絵巻』として三田の民話のイラストをスクリーンで投影し、朗読と演奏者考案の口説のコラボレーションを披露した。

また、市民ギャラリーでは三田民話のイラスト（水彩）の原画展を同時開催し、琉楽と三田の魅力、民話について興味を持っていただくきっかけになった。

ホール担当者の意見・評価
三田市総合文化センター　大浦　淳子

①　応募の動機・事業のねらい

当館では邦楽公演の開催が少ないため市民に邦楽に触れる機会を設けたいと思っていた。

また、2010年より三田市内小学校を対象にアウトリーチを行っているが、これまで邦楽の要望をいただいても、ホール登録アーティストがいないため洋楽での訪問がメインだった。

この事業を通じて、上記2点の解消と継続して邦楽公演を行うことで邦楽の魅力を伝え、市民に邦楽を身近に感じていただくことを目指した。

②　企画のポイント

研修会の課題を提出するにあたり地域について調査し、三田に100以上の民話が語り継がれている事を知った。

市民でも多くの民話があることを知らない方も多く、周知するきっかけになればと民話の朗読と邦楽のコラボレーション（三田在住のアーティストに朗読を依頼し、民話の挿絵をスクリーンに投影し、音楽と組み合わせる）を提案した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

提案時には、効果音として音楽を流すのか、民話からイメージされる曲を演奏するのかなど民話と琉楽をどのようにコラボレートするのか具体的なアイデアはなかった。

コーディネーターから琉球音楽のインパクトに民話が負けてしまう恐れもあるとアドバイスもあり、コラボレーションは諦めようか迷った。

また、コラボレート決定後は、100以上もある民話の中からどの民話を紹介するかも悩んだ。

④　上記③をどのようにクリアしたか

アシスタントの田中さんが演奏者の意向を確認してくださり、演奏者の棚原さんから三田の民話のために口説を作ると提案いただいた。それでも尚どのような感じになるのかイメージできなかったが、朗読→口説→朗読→口説と交互に披露していくなど具体的な進行を聞き、イメージを固めていった。

民話は三田市の担当課、原画作者に相談して5話まで絞り込み、最終的には演奏者が２話を決定した。

⑤　事業を実施しての成果

アウトリーチでは小学校を対象に行っていたが、私が担当になり久しぶりに福祉施設に行くことができ、演奏を楽しんでいる様子を間近で拝見し、福祉施設にも継続して訪問したいと思った。アウトリーチ後の意見交換もとても勉強になった。

ホール公演は演奏者、コーディネーター、舞台スタッフ、ホールスタッフで創り上げていき三田と琉楽の魅力をお伝えすることができた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

琉楽と民話のコラボレートなど具体的な内容が決定してからのリリース発行となり、地元の神戸新聞がアウトリーチを取材､前日に公演案内とともに掲載いただき反応はあったが､目標の集客に届かなかった。来場者からはとても好評で、再演を希望する声も多かっただけに、もっと多くの方に来場いただきたかった。アウトリーチで訪問した小学校の児童、施設の方のコンサート来場は嬉しかった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

私自身が三田市出身ではないので、研修会の課題で三田の歴史などについて改めて調べたり勉強した事は今後の財産になった。

郷の音ホールが三田市の文化の中心であり続けるため、地域に根ざした、郷の音ホールならではの公演、邦楽はじめ音楽の魅力を伝える公演を開催し、気軽に来場いただけるホールになっていくよう願う。

コーディネーターレポート　それぞれの「初めて」
米澤　浩

今年度の邦楽事業に兵庫県三田市総合文化センター『郷の音ホール』が手を挙げて下さり、リーダーで歌・三線の棚原健太さん、琉球箏の町田倫士さん、琉球笛の大城建大郎さん３名（以下、敬称略）の『琉楽（りゅうがく：琉球古典音楽）チーム』が担当することになった。

『琉楽チーム』がプログラム構成の軸に置くものは昨年度の富山県黒部市でのコーディネートで知っていたので、再び彼らのプログラムに立ち会うことが楽しみだった。

又、三田市は旧石器時代まで遡れるほど歴史があるだけでなく、145話もの《民話》が語り継がれていて市がホームページで《民話》を紹介するほど豊かな地域資源を持っている。

この三田市のカルチャーハブである『郷の音ホール』での邦楽事業の実施も楽しみだった。

希望とハードル

スタートは23年７月11日、『郷の音ホール』事業ご担当の大浦さん・岡本さんと舞台技術チーフの武田さん、コーディネーターチームの田中さんと米澤、そして地域創造の担当矢嶋さんとスタッフサイドが全員揃ってのZoomミーティング（ZMTG）から始まった。

『郷の音ホール』では邦楽はもちろん《琉楽》を取上げるのは初めてだったが、「事前アンケート」にはホールプログラムのアイデアとして《民話》の《朗読》と《水彩画》の投影に『琉楽チーム』の演奏を組み合わせる希望をあげていた。

これは三田市の人的地域資源の多彩さからのアイデアで、NHK朝ドラでの方言指導や出演で常連女優（と私が思っている）の一木美貴子さんが三田市在住、レジデンシャルアーティストにはラジオパーソナリティーもなさる声楽家の梅北千香さん、そして神戸新聞に民話の水彩画を連載なさっていた水彩画家の岩本芳子さんも『郷の音ホール』とのゆかりが深く、多ジャンルの文化人がいらっしゃるからこそのアイデアだった。

しかし、ZMTGの段階では無理なく自然にコラボできるアイデアが浮かばず、かえって色々な懸念がハードルとして浮かんで来てしまった。

・琉球音階のメロディーが流れて来たとたん、目の前に「ハイビスカスが風に揺れる白い砂浜が広がる風景」が浮かんで来ないか？　⇒「民話の世界観」と「琉楽の響き」を並立させられるか？
・ホール公演の構成で、コラボ作品に「自然さや必然性」を持たせられるか？　⇒ 無機的に並べただけでは、「取って付けたような構成」にならないか？
・何よりお客様方にプログラム全体の流れを自然に楽しんで頂けるか？

等々があがり、ZMTGの段階ではコラボの実現は難しいかも知れないとの流れになった。

口説が救う

実は、後から分かったことだが『郷の音ホール』の大浦さん・岡本さんは「地域創造の邦楽事業では何らかの形で地域資源を活かす（コラボレイトする）ことが基本。」と思われていたようだった。

後日、「コラボを諦めた方向で検討し始めている。」との情報が入って来たが、豊富な地域資源があることを知りながらも残念な展開になりそうな流れに、私自身「何とも、もったいない」という思いが捨てきれずにいた。

『郷の音ホール』とのZMTGからどれ位経った頃だったかは定かでないが、豊富な作品がある《琉楽》の中に「即興的で自由度が高く、色々な物事・出来事を叙事詩として歌い上げる《口説》（くどぅち）」というジャンルがあることを思い出した。

そこで7月の末に棚原とのZMTGを持ち、コラボの構想と共に「三田の《民話》を数話選び、《民話》

由来の《口説》を作ることは出来ないだろうか？」と相談を持ち掛けた。そして、これと同じ作品作りの手法は、先々『琉楽チーム』が全国展開していく際にも良い手法になるだろうことも伝えた。

棚原は「やったことは無いけれど面白そう」と興味を持ってくれ、《琉楽》と《民話》をオムニバス形式で一つの作品として作り上げられる可能性が見えて来た。

有機的融合で「唯一無二」

8月末に行った現地下見を経た9月の中旬、棚原は構想を練りテキストを推敲して2話の民話のために5曲の《口説》の歌詞を書き上げた。

そして、『郷の音ホール』では2話の《民話》の水彩画４枚と《口説》の歌詞5枚のスライドを作り、《民話を軸にして複数のアートを融合させた作品》オムニバス・コラボのための必須アイテムが揃った。

「朗読台本」が一木さん・梅北さんに渡り、『郷の音ホール』の舞台に『琉楽チーム』と『地域のアーティスト』の皆さんが集わなければ出来ない作品、民話由来の《口説》・民話の《朗読》・民話を題材にした《水彩画》の投影、複数のアーティストが有機的に融合した唯一無二の作品『三田と琉球の水彩絵巻』の誕生が固まった。後は、初演の舞台を楽しみに待つだけとなった。

アクティビティ

『郷の音ホール』では、「本庄小学校」・「さんだ子ども発達支援センター：かるがも園」・「特別養護老人ホーム：さんすい園」・「就労継続支援事業所：スクラム」でそれぞれ１回ずつと、４回の対象施設が全て異なり対象者の年齢も「幼児～ 106才」というアクティビティを設定してくれていたが、これは私も未経験の対象年齢の幅の広さだった。

『琉楽チーム』は小学校ではこれまでの彼らの構成をブラッシュアップして「掛け声」でコミュニケートを図る要素を盛り込んで臨み、神戸新聞が取材に訪れてホール公演前日の12/2に記事にして下さった。その他の施設では、「沖縄の手踊り」を盛り込んだ『沖縄の体操』でコミュニケートを図り、事前に『沖縄の体操』の紹介ビデオも作って３ヶ所の実施先に提供する等、準備を固めて臨んだ。

アクティビティでは印象的な光景があった。「かるがも園」では子ども達が終演後に『琉楽チーム』に駆け寄って集まり手を握って喜んでいた姿、さんすい園には沖縄出身の方がいらっしゃり、その方が最後まで我々の車を見送って下さっていた姿、スクラムでは最前列に座っていた通所者の皆さんが立ち上がって「カチャーシー」を踊り始め、町田と大城も演奏を止めて棚原の三線にのって一緒に「カチャーシー」を踊っていた姿、どれもが印象的であっただけでなく感動的ですらあり、音楽が全ての人に平等に沁み込んでいくことを実感した光景だった。

今回のそれぞれの社会福祉施設でのアクティビティは『琉楽チーム』にとって初めての対象もあったと思うが、これらの経験は全国展開の時だけでなく沖縄県内での活動に向けても、良い経験値・実績になるに違いないと思う。

これらのアクティビティを設定して下さった岡本さん・大浦さんに深く感謝したい。

前日のリハーサル

４回のアクティビティを終えたホール公演前日の夕方、《琉楽》と《朗読》のアーティストが舞台に揃い、マイクバランスのチェックからリハーサルがスタートした。念入りな打ち合わせのお陰で、実にスムーズな進行だった。

ここで初めて舞台照明の入ったリハーサルを見たが、これを見た地域創造の職員が漏らした「ホール

さんが本気になっていますね」という一言が印象的だったし、私も同感だった。

この前日リハで《述懐節》（しゅっくぇーぶし）の舞台を見て沸き上がって来た私のイメージをチーフの武田さんに伝えたところ、「舞台上で完成させてしまうのではなく、舞台を見たお客様方それぞれの中で作品を完成させたい」旨の一言、深く同感した。

ホール公演等の事業を全て終了させた後の「振り返り」で、武田さんが「我々を本気にさせてくれるプログラムだった。」と言ってくれていたことも嬉しかったが、舞台上の演者だけでなく舞台を作り上げる技術者の皆さんも「公演の実現に向けて参加するアーティスト」になってくれていたことが何よりも嬉しかった。

本公演の舞台とロビー

当日のGPも事前の準備・段取りのお陰で時間的に余裕を持って進み、客入れ時間も余裕を持って迎えることが出来た。

開場したロビーでは実施したアクティビティを紹介するパネル展示が行われたが、キッズ事業を担当する東（あずま）さんが随行してくれたアクティビティの様子だけでなく、『琉楽チーム』のオフステージでの様子も紹介する写真を張り出してくれ、事業だけでなく『琉楽チーム』の人柄も紹介するとても良いパネル展示だった。

本公演が始まり、『琉楽チーム』がそれぞれのキャラクターを活かしたMCでプログラムを進める中、「本庄小学校のお友達は来てくれていますか？」の投げかけに一人の男の子が元気よく手を挙げてくれた。終演後、ロビーに出た大城が本庄小からのお客様の肩を抱きながら「来てくれたんだね～。楽しかった？」等とやり取りをしているだろう光景は、実に微笑ましかった。

オムニバス・コラボ

トリに置いた『三田と琉球の水彩絵巻』への導入は、《琉楽》の世界から《次のフェーズ》に進むイメージをお客様方に提示して「作品への期待感」を高めて頂きたかったので、そこまでのプログラム進行から一線を画すよう提案させて頂いた。

第二部『琉楽チーム』が《琉楽》の紹介を終えて明るい中を退場、照明は最低限の明かりへ、その中舞台転換が行われ、タイトルが投影されて「ほの明るい」中『琉楽チーム』が登場し調絃、そして朗読者が板付いてスタンバイを完了。

『琉楽チーム』に明かりが入って《口説》でスタートするという流れだが、『郷の音ホール』でしか成立しない唯一無二の作品をお客様方が楽しんで下さったか？とても気になるところだった。

しかし、カーテンコールとアンコールへの拍手、終演後にお見送りに出た『琉楽チーム』の前にできたお客様方の行列、終演後にお客様方がロビーからなかなか引いて行かない光景、それぞれに公演の成功を感じた。

打ち上げのお開き

打ち上げでは、良いコンサートを持てたという実感を全員が共有していた。だから盛り上がり、お開きになっても皆別れ難い。

全員で店の前に輪を作っている様子を少し離れた所から眺めていたら、武田さんが歩み寄って来て「良いグルーヴ感ですよね。」と、私も「良い眺めですよね。」と応えた。

事業を成功させた実感を共有できたことも、コーディネーターとして非常に嬉しいことだった。

アウトリーチ進行シート（兵庫県　三田市）
田中　舞（アシスタント）

実施日	令和５年12月１日
実施先	三田市立本庄小学校
対象・実施先の情報	対象：全校生徒（１～６年）42名 場所：音楽室
出演者	棚原健太（歌三線）・町田倫士（琉球箏）・大城建大郎（琉球笛）
ねらい/目標	琉球音楽の紹介、お囃子や口説を体験して琉球音楽の自由さ、幅広さを感じてもらう

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	・呼び込み、自己紹介 ・M1について (3：54)	・先生の呼び込みで、町田、大城の後に棚原が弾きながら登場 ・自己紹介、沖縄・琉球の紹介 ・1曲目は王様の前で弾かれた曲。王様の気持ちになって聴いてみましょう。	町田、大城、棚原の順で登場 棚原、町田、大城の順で自己紹介
3：54	Ｍ１ 湊くり節 (1：36)	棚原健太（歌三線）・町田倫士（琉球箏）・大城建大郎（琉球笛）	
5：30	・琉球古典音楽と沖縄民謡 ・ハヤシの練習 (3：47)	・古典音楽ってどのくらいあると思いますか？　古典音楽だけで200曲ほどあると言われています。 ・次はお城を出てまちへ。人々の生活から生まれた音楽はなんと数千曲あります。今日はその中から「仲順流れ」という曲を演奏します。 ・仲順流れはエイサーでよく登場する曲です。かけ声を練習してみましょう。 ・「ハーイーヤー」のかけ声を練習。	MC：棚原→町田 ※かけ声の際、町田がきっかけ、大城が手拍子で合図を出す。
9：17	Ｍ２ 仲順流れ (1：20)	棚原健太（歌三線）・町田倫士（琉球箏）・大城建大郎（琉球笛） ※実際に参加者が「ハーイーヤー」のかけ声で参加。	
10：37	・楽器の紹介 (8：35)	・琉球箏の紹介（町田）　＊ワンフレーズ演奏あり ・琉球笛の紹介（大城）　＊ワンフレーズ演奏あり ・三線の紹介（棚原）	MC：町田→大城→棚原 ※棚原による三線の楽器紹介の際、町田、大城でニシキヘビの皮を見せる。
19：12	・琉球音階の紹介 (1：29)	・今まで演奏した曲で沖縄らしさを感じた瞬間がありましたか？ ・秘密はメロディーにも隠されています。馴染みのある音階からどの音を２つ抜くと沖縄らしい音階になると思いますか？ ・琉球音階を使って「カエルの歌」を演奏してみます。	MC：棚原
20：41	Ｍ３ カエルの歌 (0：42)	棚原健太（歌三線）・町田倫士（琉球箏）・大城建大郎（琉球笛）	
21：23	・M4について (0：53)	・琉球音階を使って、沖縄では今でも新しい曲が生まれています。みなさんもCM等で聞いたことがあるかもしれません。	MC：大城
22：16	Ｍ４　海の声 (1：30)	棚原健太（歌三線）・町田倫士（琉球箏）・大城建大郎（琉球笛）	
23：46	・口説について (1：41)	・今まで聴いてきてもらったように、沖縄の人はことあるごとに音楽を作り出してきました。沖縄では「歌」をとても大切にします。 ・「口説」には、決まった歌詞のリズムがあって、沖縄の人は歌を即興で作って楽しんでいました。今でいうフリースタイル、ラップのようです。 ・船旅の様子をうたった「上り口説」を演奏します。	MC：町田
25：27	M5 上り口説 (1：12)	棚原健太（歌三線）・町田倫士（琉球箏）・大城建大郎（琉球笛）	
26：39	・口説づくり (9：15)	・「口説」は即興で歌を作って楽しめる音楽。次はみなさんと一緒にオリジナル口説を作ってみたいと思います。 ・ホワイトボードにあらかじめ書いておいた口説の歌詞の空白部分を、児童の意見を聴きながら埋めていく。	MC：棚原 ※ホワイトボードを出し、町田、大城で板書
35：54	Ｍ６ 口説 (2：01)	棚原健太（歌三線）・町田倫士（琉球箏）・大城建大郎（琉球笛）	※棚原、ホワイトボード横に立ち、板書の歌詞を見ながら演奏
37：55	・挨拶、退場	・世界で一つだけのオリジナル「本庄小学校口説」ができました！ ・沖縄で郷土を大切にするように、みなさんも郷土の文化を大切にしてください。 ・ホール公演のスクールシート（学生無料席）の案内を行う。	

実施団体：NPO法人宇土の文化を考える市民の会
実施時期：令和５年10月５日（木）～令和５年10月７日（土）
出演アーティスト：藤重奈那子(箏・三絃)　遠藤咲季子(箏・十七絃)　森梓紗(箏・三絃)

アクティビティ

タイトル：邦楽ミニコンサート
期　　日：令和５年10月５日(木)　10:30～11:15
会　　場：宇土市民会館　大ホール
参 加 者：37名（特別支援学級:10名/サードプレイス登校生:14名/ほっとスペース:５名 教員:８名）

教室に行けない子どもたち対象のアクティビティとして、ホールでインリーチ形式で開催。

生徒の心理的負担を軽減するため、大ホール客席の広い空間を活用し生徒間の距離を置き、客電は暗めに設定するなど工夫をおこなった。また、ほっとスペースには開催の２週間前から自由に触れる箏を一面貸し出し、興味をもってもらうキッカケづくりをおこなった。

皆コンサートの最初は緊張した様子であったが、徐々に演奏に引き込まれ、終演後の体験コーナーでは、ほぼ全ての生徒が舞台上に上がるなど、心理的障壁をうまく超えることができ、先生方からの満足度も高い事業となった。

後日談：事業終了後ほっとスペースにおいて子ども達が自分で琴柱を調整し、楽しそうに好きな曲を演奏する様子が見られている。

タイトル：邦楽のひととき 駅カフェコンサート
期　　日：令和５年10月５日(木)　14:30～15:30
会　　場：網田駅カフェ　レトロ館
参 加 者：31名（近隣住民・網田老人クラブ）

過疎・高齢化が進む宇土市網田地域の住民を対象に、県内最古の木造駅舎である網田駅内の駅カフェにおいて、コンサートを開催。網田駅カフェは地元の地域おこし団体である「NPO法人網田倶楽部」が10年前から運営し、定期的にライブや歌声喫茶を開催するなど、地域住民の寄合所、憩いの場となっている。

コンサートでは網田駅カフェならではの選曲と、レトロな雰囲気が相まって大変あたたかな空気感を醸し出しており、「汽車ごっこ」演奏直後にホームに汽車が到着する偶然のサプライズがあるなど、お客様から大きな拍手が起こっていた。

本アクティビティで、網田倶楽部との全面的な協力体制を築けたことも大きな収穫となった。

タイトル：親子で一緒に日本の音を楽しもう！
期　　日：令和５年10月６日(金)　10：30～11：00
会　　場：宇土市児童センター
参 加 者：34名（０歳から４歳までの子ども達15名とパパ・ママ19名）

普段生で音楽を聴く機会が持ちにくい子育て世代に対し、赤ちゃんとパパママが一緒にくつろげる癒やしの時間を提供することをコンセプトにしたミニコンサート

赤ちゃん達は音に合わせ拍手したり、ここちよい音楽に包まれすやすや眠ったりと、演奏者も一緒に癒やされる時間となった。

来場された妊娠中のお客様からは「二人目の妊娠でコンサートに行く機会が無くなっていたので、とてもありがたい時間でした」と感激のお言葉をいただいた。

タイトル：邦楽のひととき ランチタイムコンサート
期　　日：令和５年10月６日(金)　12：20～12：50
会　　場：宇土市役所　市民交流スペース
参 加 者：54名（市民24名　市役所職員30名）

熊本地震で倒壊し令和５年５月にリニューアルした宇土市役所において、新設された市民交流スペースを活用したランチタイムコンサートを実施。(対象：立ち寄った市民や市役所職員)

今回のアクティビティは、市民交流スペースではじめてのコンサート利用であり、市役所としても手探りな状態であったが、結果的に複数の課と連携しながら開催につなげることができ、館としては、担当課（文化課）以外の課と協力体制を築けたことも大きな収穫となった。

コンサート又は公募型ワークショップ等

タイトル：韻-HIBIKI-めくるめく色彩と一音の生命力
期　　日：令和５年10月７日(土)　14：00～16：00
会　　場：宇土市民会館大ホール舞台上特設舞台
参 加 者：75名

多様なアクティビティ先で出会う、様々な境遇の幅広い世代の市民との繋がりの集大成となるコンサート。「一音の美しさ・深い響きを体感できる距離感」になるよう、舞台上に客席を設置し、目の前で演奏する事で演者と観客の空気感が共鳴し合うような空間を目指した。

アンケートでの満足・大変満足は90%を超え、「一音の音と音の間を聴く、新しい音楽の世界への扉が開いたようだった」等のコメントもあり、大変充実したコンサートとなった

2日前までの券売は40%程であったが、各アクティビティ場所でアーティスト協力のもと、チケット販売・宣伝活動をおこない、当日の新聞記事掲載の効果も相まって、追加座席も出す程の予想以上の来場となった。

ホール担当者の意見・評価
宇土市民会館　ホールマネージャー　髙田　大介

①　応募の動機・事業のねらい

宇土市民会館が独自で実施するアウトリーチプログラムは令和３年度から本格的にスタートしたが、企画やアーティスト選定に関して、県内他館事業の見よう見まねで企画制作したものだった。

また、劇場法、文化芸術基本法、さらにはコロナ禍を経て、劇場に足を運んでもらう事だけが劇場の役割ではなく、全ての市民を対象に文化芸術を届ける社会包摂機関としての役割が求められる中での、関係各機関との連携や、ニーズの見える化に課題を感じており、今回経験豊富な地域創造コーディネーターとの連携により、そのノウハウを得て、今後の事業の幅を広げていきたいと考え、応募に至った。

②　企画のポイント

全体研修会時点から、コーディネーターはじめ地域創造スタッフの皆さんの手厚いサポートもあり、熱意を込めて一緒に事業を創り上げていけるという力強い確信を持つことができた。

そのため、アクティビティ先として「すべての市民」をキーワードに、これまでのアウトリーチでは、なかなかアプローチできていなかった層に向けてチャレンジしようと企画・計画をおこなった。

企画のテーマは「地域課題に寄り添う／全ての世代に届ける／地域の宝を再発信する」

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

①当初計画していたコンサートの会場は大会議室で演者を360度取り囲むような客席想定だったが、下見時に舞台上舞台に変更した。反響板を組んだ舞台上舞台は初の試みであったため設営に苦労した。

②アクティビティ先4カ所のうち3カ所が集客を伴うコンサートであり、下見から事業実施までのスケジュールがタイトだったので、事業周知に苦労した。

③チケットセールスが事業３日前まで座席の半数しか販売できていない状況だったこと。

④教室に入れない子ども達への心理的障壁をどのように取り除くか。

④　上記③をどのようにクリアしたか

①照明の関係でアクティングエリアの段上げが難しく、フラットな床面で、導線も確保しつつ、できる限り前の席と重ならない客席配置で準備していたが、予想以上の当日券購入のお客様があり、どうしても見づらい席がうまれてしまった。しかし客席内に楽器を配置しての演奏や、MCでのお客様との質問コーナーを設けるなど、アーティストの工夫のおかげで、そういったマイナス要素を和らげることができた。

②各アクティビティ先の担当者の多大なる協力・声かけのおかげで、全ての会場で満員の集客となった。

③担当者として、販売数にプレッシャーを感じていたが、各アクティビティ先でアーティスト協力のもと、チケット販売・宣伝活動をおこない、当日の新聞記事掲載の効果も相まって、追加座席も出す程の予想以上の来場となった。

④子ども達がいかに気軽に会場に来てもらえるか、担当の先生方と複数回打合せを重ね、事業に対する先生方のご理解をいただき、その上で生徒達への声かけを積極的におこなってもらった。

またほっとスペースには事前に筝を1面貸し出すなど興味をもてるような仕掛けをおこなった結果、当日は劇場も先生方も驚くほど積極的に参加する子ども達の姿があった。

⑤　事業を実施しての成果

アーティストにとっては難しい現場を提案してしまい、大変だったとは思うが、思い描いていた以上のパフォーマンスをしてくださり、下見時から得たインスピレーションを、彼女たちらしい柔軟なアイデアでプログラムに落とし込んでもらえたこと。(夏の香りが残る熊本の10月、網田駅で着物で「脆性ノスタルジア」。。。すばらしい！)

その過程の中でアーティストとコーディネーターと劇場のうち、いづれかのセクションがひとりよがりな提案で進むのではなく、協力してプログラム創り上げることができたことは貴重な経験となった。

宇土市民会館のアウトリーチ事業は、ほとんどが学校現場であったが、今回「すべての市民」をキーワードに多様な世代・地域にアクティビティの枠を拡げたことで、これまで劇場スタッフとして関わってきた「市民」がいかに限定的だったかを認識するとともに、地域･団体の方々の顔が見えるようになったこと(解像度が上がったこと)はとても大きな成果だと感じる。

また、網田倶楽部の皆さん、児童センター職員、サードプレイスの先生方、複数の課にまたがった頼もしい市職員の方々など、今回が初めての試みであったにもかかわらず、皆さんこの事業をおもしろがって取り組んでいただき、連携関係・協力体制を築くことができた。今後もこういったキーパーソンとの協力関係を劇場事業でも活かして行きたい。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

担当者(私)の業務段取りが悪く、中学生むけの招待状の制作が間に合わなかったこと。

市役所ロビーにて常時表示するコマーシャルが、担当課との連絡不足により、直前である３日前からの上映になったこと。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「地域」または「ホール」について改めて考えたこと

■人口36,000人の小さな市の地方ホールで、市民の顔が見える環境だからこそ身近で具体的に感じ取ることができる、豊かな地域資源と魅力的な人材が沢山あることを再認識できた。

■石井楽器店の邦楽界における功績や信頼度の高さなど、一般の市民にとって普段あまり馴染みがないが、プロ奏者が語ることで(外からの評価)市民の誇りとして地域資源を再認識する機会になったと思う。

■各アクティビティ場所での担当者の声から、劇場が取り組む館外での文化事業への渇望とニーズの高さを肌身を持って感じることができた。

※劇場が先導して文化事業を提供しないと、ほとんどそういった催しは開催されいない現状。

■高齢者、子育て世代、不登校生徒に対し、社会包摂として文化事業が担える役割は大きいと改めて感じた。

宇土市は熊本空港から車で約40分余り。2010年度に「邦楽地域活性化事業」を実施した宇城市に隣接する懐かしいエリアだ。名誉市民の石井方二（いしい・まさじ）氏は、地歌三味線の駒と撥づくりの名人として全国に知られ、現在はご子息が４代目を継承されている。地歌箏曲にはとても縁の深い土地である。

アーティストは藤重奈那子さん（箏・三絃・十七絃）をリーダーに、大学の同級生の遠藤咲季子さん（箏・十七絃）と、下級生にあたる森梓紗さん（箏・三絃）のチーム。箏曲家３人の編成はシンプルで、幅広くテーマを展開しやすい。担当の高田大介さんは自ら太鼓奏者としても活動しており、地域事情に精通した頼もしい存在だった。

■４か所でのアクティビティ～多彩なプログラム

①　不登校の子どもたちを対象としたインリーチ

宇土市民会館に隣接する鶴城中学校と、徒歩数分のところにある”ほっとスペース”を対象に、教室で学ぶことが難しい子どもたちをホールに招き、和楽器に親しむ機会を提供する取り組み。曲目は《祝宴》から始め、《砂絵》《越後獅子》《脆性ノスタルジア》と続けた後、《新時代》を付した。

子どもたちは年齢も相互の関係性も判然とせず、参加人数も当日にならないと分からない。緊張を和らげるために客席の明かりを落とし、座席も各人の自由に任せるなどの方針で臨んだところ、想像以上に反応が良く、終了後は、ほぼ全員の生徒が舞台に上がって楽器に触れ、演奏家たちとの交流を楽しんだ。事前に箏を貸し出していたほっとペースでは《新時代》を再現してみせた子どもがいたと耳にし、驚いた。

②　熊本県内最古の木造駅舎で地域住民を対象に

宇土駅と三角駅(宇城市)間を往復するJR三角線の途中にある網田駅は、県内最古の木造駅舎として知られる。現在も電車は運行されているが、無人の駅事務所を改装し、土日祝日だけ営業する駅カフェ「網田レトロ館」が設けられていて、地域のお年寄りたちがコンサートや歌声喫茶として愛用しているという。

歌うことが大好きな元気な女性が多いと耳にし、プログラムは《祝宴》《汽車ごっこ》《越後獅子》《おてもやん》《荒城の月》《コーヒールンバ》《脆性ノスタルジア》を並べた。かなり窮屈なスペースだったが、ロケーションの良さに加え、往復する電車の乗務員さんたちも手を振ってくれたりして、のどかで温かい雰囲気に包まれた。地域の文化資源活用の好例といえ、カフェの雰囲気に合うように小紋の着物姿で臨んだミニコンサートの写真は、地域創造の令和６年カレンダーのトップを飾ることになった。

③　乳幼児とお母さんを対象にしたミニコンサート

市役所の近くにある宇土市児童センターでは、乳幼児とそのお母さんたちを対象にしたミニコンサートを開催。自由に動き回れる平土間スペースで、みんなが膝を突き合わせるようにして短時間で楽しむねらい。曲目は《祝宴》《汽車ごっこ》《砂絵》《脆性ノスタルジア》。乳幼児を抱え、外出もままならない親子に癒しの時間を提供したいという思いから企画された。

《汽車ごっこ》では機関車のペープサートを使って楽しい雰囲気を演出。《砂絵》は３方向から箏の響きで包み込む趣向。箏･十七絃の優しい響きが、赤ちゃんたちにちゃんと届いている手応えが感じられ、演奏者が思わず涙ぐんでしまうシーンも。感動の振幅が最も大きな実践となった。

④　再建されたばかりの宇土市役所で初のロビーコンサート

2023年春、熊本地震で損壊した宇土市役所の新庁舎が７年越しに完成した。これを機に、入口近くに設けられた市民交流スペースを活用して、職員や来庁者を対象にランチタイムコンサートを実施することになった。前面がガラス張りで道路側からもよく見える。道行く人にも目に留めてもらえそうだ。

ランチタイムとはいえ、職務中のスタッフもいること、吹き抜けの２階以上のフロアへの影響も気がかりだった。前日の閉庁後に音出しをして響き方を確認するとともに、関係者への根回しも進めていただいて当日を迎えた。プログラムは《祝宴》《秋風幻想》《砂絵》《新時代》《脆性ノスタルジア》。２階から覗き込んだり、通路側に立ち止まって耳を傾ける職員もいて、コンサートとしては手応えを感じた。今後の活用に道を開くことができたように思う。

■ホール公演について

コンサートは「HIBIKI－めくるめく色彩と一音の生命力」と題して、箏・三絃・十七絃を用いた古典から現代曲まで変化に富んだプログラムが実現した。和楽器の響きを身近で聴かせたいという担当者の強い希望から、ステージ上に客席を特設して進めることになった。

コンサートの前半は《祝宴》《越後獅子》《砂絵》《百花譜》、後半は《秋風幻想》《チャルダッシュ》《脆性ノスタルジア》。三絃２挺による地歌《越後獅子》は市内にある石井楽器店への敬意をこめた選曲。《百花譜》は藤重・遠藤両氏が学生時代から弾き込んできた自信作であり、《砂絵》は客席を三方から囲んで聞かせるために、箏二重奏曲を三重奏用に編曲した。終曲の《脆性ノスタルジア》はこの３人で演奏したかった曲である。とても充実した選曲と構成だったと思う。リーダーの藤重さんが、このチーム編成にした意図がよく分かる。

チケットの動きについては様子がわからず、かなり心配だったが、アクティビティ先でチケット販売の声がけをしたり、網田駅でのコンサート記事が新聞に出たことなどもあって、当日は予想以上に来場者が増え、慌てて座席を増やす羽目になったのには心底安堵した。

■今回の実践を振り返って

導入の《祝宴》と、フィナーレの《脆性ノスタルジア》は、すべての場所で取り上げたが、それ以外は対象によってプログラムの構成を変えた。《砂絵》での変則的な楽器配置の試みは手応えがあったように感じる。衣裳を含め、見せ方、聴かせ方、伝え方に工夫が見られた点は、昨年度よりも大きく進化した印象がある。とくに児童センターでのアクティビティは、赤ちゃん連れの親子と手が触れそうな距離での演奏で、赤ちゃんたちの素直な反応に感動も一入だった。そのまま市役所でのコンサートに参加してくれた家族もいた。

いろいろな場所でのアクティビティが実現できた背景には、高田さんが日頃から地域の人たちとコミュニケーションを密にしていたことが鍵となった。市役所の関係各部署との連携も見事だった。いろいろな課題を抱えている人たちへの温かい眼差しとともに邦楽の魅力を伝えたいという強い熱意、問題意識があったからこそ多様なアプローチにつながったことは確かだ。

一方で、チラシはかなり早い時期に完成したにもかかわらず、その後のやりとりがあまりスムーズに進まず、最後はかなり時間不足になってしまった点は否めない。関係者それぞれのスケジュールと進捗管理・情報共有はもう少し徹底する必要があったと痛感している。たまたま下見のタイミングで、元熊本県立劇場事務局長で、この事業のコーディネーター経験もある本田恵介さんが宇土市民会館の館長に着任されたこともあって、細かなサポートを頂戴できたのは幸運だった。改めて関係者の皆さまに感謝を申し上げたい。

アウトリーチ進行シート（熊本県　宇土市）
丹羽　梓（サブコーディネーター）

実施日	令和５年10月７日
実施先	宇土市児童センター
対象・実施先の情報	対象：乳幼児（未就学児）とその保護者　14組
出演者	藤重奈那子（箏・三絃・十七絃）・遠藤咲季子(十七絃・箏)・森梓紗（箏・三絃）
ねらい／目標	間近で箏の音色を楽しもう

時間	内容（Lap）	具体的に行うこと、話す内容	配置・動き等
0：00	自己紹介 (2：00)	・藤重、森、遠藤の順に自己紹介	参加者を会場内でお出迎え
2：00	Ｍ１ 祝宴 (3：00)	藤重（箏）、森（箏）、遠藤（十七絃）	
5：00	・箏の紹介 ・Ｍ２について (2：45)	・箏を立てて見せる（大きさ・絃の数） ・〈汽車ごっご〉について（汽車の音が出てくる曲）	藤重　MC 森・遠藤　転換、調弦
7：45	Ｍ２　汽車ごっこ（3：00）	箏（藤重）、汽車（森）	森　汽車のペープサートを持って参加者の近くを周る
10：45	・Ｍ３について (3：00)	・みなさんを囲んで演奏 ・箏を間近で見て、聴いてほしい	参加者を囲むように箏３面を配置 森　MC 藤重・遠藤　転換
13：45	Ｍ３　砂絵（5：30）	藤重、森、遠藤（箏）	
18：45	・Ｍ４について (3：00)	・聴こえ方はどうでしたか？ ・〈脆性ノスタルジア〉について（最近作られた曲、夏をモチーフにした曲）	遠藤MC 藤重・森　転換、調弦
21：45	Ｍ４　脆性ノスタルジア (7：15)	藤重（箏）、森（箏）、遠藤（十七絃）	
29：00	・終わりの挨拶 ・花束贈呈 (1：00)	・ありがとうございました！ ・参加者の子ども達から花束のプレゼント	

令和５年度
公共ホール邦楽活性化事業報告書

発行：一般財団法人地域創造
〒107-0052
東京都港区赤坂2-9-11　オリックス赤坂２丁目ビル９階
TEL：03-5573-4069
FAX：03-5573-4060
URL：http://www.jafra.or.jp/

発行日：令和６年６月